

序

勤め帰りの客で満員の地下鉄を降り、出口の階段へ急いだ。階段のあたりは、少し遅れて着いた下り線からの降車客が合流してきたため、車内よりさらに混んでいた。

ベルトを二つに折り胸元に抱いたシヨルダーバッグを、周囲の圧力から庇いながら、流れの中ほどにいて、身じろぎもできず、流されるままに、上へ運ばれていく。

突然、体がふわりと宙に浮き、エスカレーターに乗った。

それと気付かぬほど、私は膨らんだシヨルダーバッグの身の方に気を奪われていたし、何度も足蹴にされる足元にも、どうしても注意を払わずにはいらなかった。

エスカレーターは、二重に、三重に折れ、ゆっくり改札口へとぼつていく。のぼつていくにつれ、空気の密度が徐々に濃くなっていくのがわかる。空気は、改札口のある最上階近くになると、圧力を伴ったつむじ風となって、正面から向かってくる。

このエスカレーターを利用する度に、私は、いつも決まった息苦しさに襲われる。地下十数メートルの深さに、蜘蛛の巣のごとく張りめぐらされた交通網。地上数十メートルの高さに、鉄とガラスとコンクリートでこしらえられたモザイ

ク状の箱。その危ういバランス。その林立。そして、箱と箱との間を幾重にも捻れ合い、もつれ合いながら結ぶ風。いや、白い音。

あるいは、箱の内を、数十メートルの高さにまでエレベーターでのぼつていくときの、なものかに胸元を締め付けられ、吹き流され、足元を掬われていくみたいな、吃音に似た音。その音が、耳を離れない。

時計を見た。午後五時五十三分。

六時に秋永と会うことになっている。二十年ぶりになる。秋永は午前の新幹線で九州を発ち、講義で少し遅れるかもしれないという私より先に店に着くことになっている。あと七分。この分なら、なんとかぎりぎり間に合うかもしれない。

私たちは大学二年のとき、酒の上での座興から、「白亜紀の会」という二人だけのサークルをつくった。それは、「時間」という連続線における、点の存在もしくは非存在について」と題し、何十回となく聞かされた持論を秋永がまたとうとうと喋り始めたため、辟易した私が、「できるだけ非連続的に議論を継続しよう」と、矛先をかわそうとして成ったものだった。だから、会といっても実態などあるわけがなく、にもかかわらず酒の勢いに駆られた秋永は、その場で旗揚げ宣言をし、十人の幽霊会員を加え、翌日教務課に届け出た。

それが、どういうわけか同好会として認められ、やがて十二人分の補助金を手にした秋永は、したり顔で私を伴い、ピアホールにくり出したのだった。

らかに広がり、広がり過ぎては伸びたり縮んだりした。

しかし、なにもものかの笛の音が鋭く広場を裂くと、円はその場に立ち止まり、息をとめた。そのまま、あたりのすべてを静寂の中に包み込んでしまうのかと思うほどの刻が流れた後、いきなり宙に弾けた。

すると、それまで小さく瞬いていた蛍たちは、緑色や紫色やオレンジ色の夥しい光の玉となり、闇の中を渦を巻き、尾を引いて交錯し、左から右へ、右から左へと漂い始めた。

光の玉は、縦にも横にも、斜めにも後ろにも生まれ、漂い、私たちの体からみつき、と思うと邪険に離れ、そしてはるか遠くに翔んでいく。

「メリーゴーラウンドだな」秋永が、私の肩を乱暴に揺すつた。秋永はいつもの、激しい情熱で「点」の消長を執拗に嗅ぎとろうとしているときのあの目で、まるで奇怪なものでも探るかのごとくに、光の乱舞を見詰めているのだった。

あれから、二十年になる。私たちは、二十年後に再び白亜紀の会をもつことに決めていた。

場所は、会を結成して初めてくり出したピアホール。時間は、六時。これも、あの日、二人でジョッキを傾けたときとまったく同じ時間である。

二十年後の同好会に、私たちは、会のテーマにふさわしい成果を持ち寄ることになっていた。その内容は、それぞれが選択し、工夫し、互いが顔を合わせるまでは一切を洩らさないこととしている。

白亜紀の会員である私は、就職試験のために九州に帰るといふ秋永とともに、秋永の故郷である仙道市を訪れたことがある。思えば、会の活動といえるほどのものは、後にも先にもこの一度きりであったのだが。

二人は酔っていた。酔って、ようやく夕風から解き放たれた微風の流れ始めた仙道の町を歩いた。

町は賑わい始めていた。その日は、この山間部の小さな町が、年に一度の「献灯籠」で揺れる日だった。

町の辻には菰樽が置かれ、男たちが柄杓の端から雫を滴らせながら、イッキ飲みをしていた。決められた時間に、何杯飲み乾したかで優劣を競うのである。男が柄杓の最後の一滴を飲み乾すと、大袈裟な身振りで柄杓を頭上にかざすので、その度に、とり巻いた女や子供たちの間から喚声があがった。

傍の電柱にくくりつけられたスピーカーからは、テンポの早い曲がボリウム一杯に流れ、紅白のテントには長老たちが陣どり、テーブルには商品が山積みされていた。

秋永は、ふらつく足どりで先を歩いた。暮れきつた広場には、かなりの人が群れていた。太鼓が低く鳴らされ、爆竹の弾ける音がし、あちこちでフラッシュが焚かれていた。

遠くで犬も鳴っていた。そのとき、どこかでなにかの崩れていく気配を感じたのは、酔いのただ中にいるときによく陥ることがある、私だけの感傷であったのかもしれない。

やがて、灯籠を頭にいた、いた少女たちが広場の中心に現われた。少女たちは、細く透き通った光を一つずつ胎内に埋め込んだ蛍だった。少女たちは円をつくった。蛍の円はなだ

私は、身じろぎもならず、押しこめられた格好のまま、エスカレーターの奥ばにいて、この数年をかけてこしらえた十本のビデオテープが人混みに潰されやしないかと、そればかりを気にしていた。抱えたビデオは、「フューチャー・ソング」と名付けたもので、アメリカやカナダなどに留学した際、研究や調査の間のわずかな時間を縫っては、慣れないカメラを回し続けたものである。

六時前五分、になった。

改札を抜けて、続きのデパートのフロアを駆け、いったん地上に出た。地下道をくぐって店に出る手もあるのだが、この時間は、地上の方が人通りが少なくない。

それは長年の経験で知っていたし、吹き流されていく例の音から、早く逃れたいということもある。しかし、なによりも、シヨルダーバッグのビデオテープを潰されなため、できるだけ人混みを避ける必要があった。

なにしろ、秋永と会うのは卒業以来二十年ぶりである。あの仙道市で共有した「点」から、今日の「点」にたどり着くまで、二十年という時間が流れている。

秋永は仙道市教育委員会に入り、現在は総務課長のポストにあるという。あの議論好きな秋永のことであるから、教職組などと対峙することの多い総務課長という職は、うつつけであるに違いない。

もつとも、秋永の最初の目標は、司法試験をめざすことにあったらしいのだが、司法というものあまりの現実臭にや

る気をなくし（と当人はいつていた）、とはいえ結局、司法とあまり毛色の違うない役人になってしまった。

というのも、仙道市という、九州の山間部の小さな町に職を得なければならなかったという、のつびきならぬ家庭の事情によるものが原因であつたらしいのだが、「いよいよ俺は、じっくり尻を落ち着けて、時間という連続線における点の存在の可否について、俺なりの追求を始めることができるぞ」と、発車間際の夜行列車の窓から不精髭の面突き出し、見送りの私に怒鳴ったものだった。

私はといえは、就職にあぶれてぶらぶらしているところを、母校の教室に助手として拾われ、そのうち運よく論文をもつにすることができ、さらに、講座准教授の病氣退職や、先輩助手の転出などという事情から、自分でも思いもよらなかつた出身講座の准教授に昇格したのだった。

その間の十四、五年というもの、秋永とは年に一度、賀状で互いの所在を確かめ合う程度の付き合いをしか行わなかつたのであるが、六年前の暮れ近く、研究室に入った電話で、にわか二人の間の距離が縮まった。

電話は、東京駅からだった。帰りの新幹線に乗る間際だという。秋永は飛行機に乗れない性分で、学生時代など「あんな無粋なものが、空を飛ぶこと自体がおかしいよ」と真剣にいつたものだった。癖はいまに至っても変わらないらしい。

年末には、出張で毎年上京しているという秋永に、「一度だつて会おうとしないのはどうしてだ」と私が詰ると、「約束だ。二十年間の成果を土産に会う、ということにして

たからな」と、発車を告げるらしいベルの音と一緒に秋永の甲高い声が返ってきた。

そのときの私は、一年間のアメリカへの留学に発つ直前であつたので、カナダやイギリスや北欧にも立ち寄ることに急遽スケジュールを変え、荷物の中にビデオカメラ一式を加えたのだった。

店のドアに手をかけようとしたとき、ちょうど近くのビルの時計台から、六時を告げるチャイムが流れ始めた。

私は、見覚えのある店内に入った。店は、二十年前と殆ど変わらない場末風の佇まいのままそこにあつたし、二人が向かい合ったあの煤けたぶ厚い洋材のテーブルも、元のままの位置にあつた。

私は、躊躇なくテーブルに腰を下ろしたのだが、箱の中特有の希薄なその場の空気によく呼吸が整ってくるにつれ、先にかけて待っている筈の秋永の姿がないことに気付いた。五つしかない店内のどのテーブルにも、十人ほどが座ることのできるカウンタにも、秋永の姿はなかつた。

時計を見直した。念のため、デジタルの日付表示も確かめ、ドアの外に立つ隣のビルの日付表示まで確かめた。

間違いなかつた。

なにかがざわめいていた。そんな気がした。人々の表情に、ゆえ知れない苛立ちの色が浮かんで消えた。ことばに捨て鉢とも焦りともみえるトーンが感じられた。

やがて、三十分が過ぎた。まばらだった店内が、いつの間

にか人いきれと、ホップの臭いでむせかえるほどになった。

客たちの酔いがまわるにつれ、広くない店内は、ボルテージのあがつた声がとび交いだし、それでいてなにを喋っているのか聞きとれないほど、大きな音が耳に被さってくる。

一時間近くが過ぎた。ここまできると、店員もさすがにたまりかねたのか、いつまでも注文を出そうとしない私に、何度も視線を向け出した。私より遅れて入ってきた客たちのうち、二組が早々に入れ替わっていった。

それにしても、秋永はいつたかどうかというのだろう。昨日の午後、仙道市役所に電話を入れたとき、「いよいよ明日だな。二十年も会わせないなんて、とんでもない野暮な会だよ」と大笑いしていたのに、である。

私は、そのとき店のドアに近付いてきた人物が秋永ではないか、と振り返って見た。が、明らかに人違いだとわかると、これ以上待つても現われることはないと思ひ切り、その場を去ることにした。

店を出た。既にあたりは、うつすら夕闇に包まれ始めていた。正面に、ビルがそそり立ち、目線のあたりに日付と時間と温度を知らせるデジタル表示が、ひときわ明るい光を投げかけていた。「二〇〇〇年六月三日、十九時三分、気温二十六度五分」と、はつきり読み取れる。

地上四階の中空に立つ私は、内に割れかえるほどの音を包み込んだまま、幾百、幾千もの箱たちが、こうして無言のままに林立している様を、どこかで見たことがある光景だ、と

思った。

私は、夕暮れの墓地が好きで、勤め帰りのバス停から家まで歩く二キロばかりの途中に霊園があり、私はときどきその入口に歩み入る。そして、じっと石たちの前に佇んでいると、幾百、幾千という声がその石たちの内に渦巻き、なにかを私に向かつて必死に囁きかけようとしているのを、肌に痛いほどに感じることもある。

白い声。白い音。もろもろの白い音たちが、いま、こうして見下ろしている私の足下で、あるいは私の頭上で、蜂の一群の羽音に似た無数の振幅を響かせ、縦横にとび交っている。空中に浮かんだままの私には、手指をすり抜け、首筋にまつわりつき、足元をさらっていくそれらのものたちの声（いや音が）、おぼろげなことばとなって、高く低く、遠く近く、執拗に語りかけようとしているのを、かすかに聞きとることができる。

— 白い街並は、すべてのものたちが移ろいゆく兆しなのだ。

— 何度も何度も経験した、これまで。

— 火器による応酬。無差別の蹂躪。断末魔の叫び。

— 光速でとぶ飛行船。星間旅行。惑星基地。天を突き破るほどの巖かな神殿。

— 眠たそうな顔。そのくせ、頭のとっぺんから爪先にまで、隙なく埋め込んだガラス玉やプラスチックや金ピカの石。

音を振り払いながら、地下鉄に向かう階段の方に歩きかけたときだった。

「マグニチュード七・五。航空機は運航見合わせ。東海道新幹線は、上下線とも運転を停止」

ふと、目蓋を横切っていたものがある。

最初、私には、それがなにを意味するものかわからなかった。階段を二段、三段と下りかけ、あわてて元の位置まで駆けのぼった。「十五時三十分頃、近畿地方東部を震源とした強い地震発生。東部域で震度七。マグニチュード七・五。震源の深さは二十キロ。津波の心配はなし。家屋倒壊などの被害多数。現在詳細不明。航空機は運航見合わせ。東海道新幹線は、上下線とも運転を停止。復旧の目処は立っていない」

地下鉄駅ビル屋上の電光ニュースが、何度も同じ文字を流している。文字は、朱色の帯となって、右から左へと流れ、薄闇の中に次々に落ちていく。と、前と寸分違わぬ朱の文字がまた右方から生まれ、まるで地下鉄ビルの催し物でも告げるといふ何気なさで流れていく。

十五時半頃に地震発生というから、恐らく数時間の間、ずっと同じ内容の文字を繰り返して流し続けているに違いない。

私がシオルダーバッグを抱え、地下鉄の階段を上がっていたときも。苛立ちながら、テーブルの隅で秋永を待ち、そびえ立つビルを仰いで、あてもなく吹き抜けていく白い音のことばを聞いていたときも。

あるいは、研究室を出て地下鉄へと急いでいたとき。いま一つ乗りの悪い講義に学生が次々に中途退室していくのを、なす術もなく見送っていたときでさえ。

ということは、多分秋永は、車中で足止めをくらっている

ということになる。二十年ぶりで会を開くその当日に、ふいの事故で足元をすくわれてしまったのだ。

いかにもわれわれの会らしい、といえばこれ以上のいいようはないかもしれない。

考えてみれば、白亜紀の会は、成り立ちからして、怪しげなことこのうえもないものだった。勿論、活動計画などあらゆる筈もなく、教務課に提出する書類にも、秋永がその場で思いついたでたらめを記入したにすぎない。

「非連続的点的追求のためには、人智など愚にもつかぬほど虚しいものさ」秋永が、舌打ちとともに吐く決まり文句は、いつもこれだった。

白亜紀の会には、最初から現実を掴みとろうとするミクロ的思考など、これっぽっちもなかったし、歴史や科学に学ぼうなどというマクロ的謙虚さも持ち合わせていなかった。

秋永の諧謔を好むセリフをいま一度借りれば、時間、それは瞬時に過去、現在、未来を往来し、循環し止まない筈のものであって、われわれ人智によつてたつものは、その廣大無辺の空間を、あてもなく漂い流れる蜚みたいなものにしか過ぎないのであった。

そういう「伝」によるならば、廣大無辺の時間と空間の循環の中で、二十年ぶりという一つの微小な位置に、二つの点がびたりと寄り添うなどということは、全く奇跡にも等しいことがらである、ということになるうか。

私は、ビルの階段を一段、一段と下り始めた。

どういう照明の工夫によるものか、透き通りそうなほどに青く白く輝る階段を一つ一つ下りながら、私は、いったい自分は本当に下っているのか、それともものぼったり下ったりしているのか、判然としない。その実、底まで見通せる階段を、確かに下りている筈であるのに、いつまで経っても、私と底との距離は縮まらないのだったし、当の私自身の靴音すら聞こえないのだった。

あいかわらず、目の前の電光ニュースは、同じ目の高さで、同じ朱色の文字を、ゆつくりと流していく。

「十五時三十分頃、近畿地方東部を震源とした強い地震発生。東部域で震度七。マグニチュード七・五。震源の深さは二十キロ。津波の心配はなし。家屋倒壊などの被害多数。現在詳細不明。航空機は運航見合わせ。東海道新幹線は、上下線とも運転を停止。復旧の目処は立っていない」

秋永は携帯などを持たない主義である。「逆探知されるなんて無様なことは、白亜紀の会員にはそぐわない」とでも考えているのかどうか、年に一度の賀状のやり取りの中にも、その類の記述を見たことがない。

私は、肩に食い込み始めたシオルダーバッグをほんの少しずり上げようとした。

たいして、力など込めていないつもりだった。決して乱暴に揺すったでもなければ、足元のバランスを崩すほどの酩酊のなかにいるわけでもなかった。その証拠に、秋永がどどまっているだろう名古屋方面は、この電光ニュースの真向かいに当たることをちゃんと知っている。

気付いたとき、肩をすべったバッグは、踊り場の端に向けて勢いよく転がっていった。

そして、バッグから転がり出た十本のビデオは、白い音に吸い寄せられるかのごとく階段を落ち始めた。ゆっくりと、上になり、下になり、交錯しながら、ふわりと浮き上がり、まぶし過ぎる夥しい光の渦に包まれ。

* *

フューチャー・ソング（第四章）

火の山

友紀夫が生まれるおよそ一年前、あたりは火の海だったという。火の海は三日三晩続いて、地の上のありとあらゆるものを炎に包み、空にたちのぼらせた。

火の海の後には、焼けただれた地の表をめぐれあがらせ、粉々に砕け散らせるほどに大地が揺れた。それはまた、三日三晩続いたという。

大地が揺れた後は大雨で、天を真黒に閉ざしてしまつた雲の塊が、人の親指ぐらいの雹をまじえて黒く冷たい雨の束を降らせた。冷たい雨は、また三日三晩続いたという。

「もうお前も十になる」徳さんはいう。

で叫ぶ。

「友子なら山の方に行つたよ」徳さんがいった。

「なんだって。山の方」ヨネ子とはとびあがりそうになる。

「火の山か、蛇の山か、魔の山か」と、目をむく。

「徳さん、あんただって山に近付いちやいけないってこと、知ってるだろ。で、火の山か、蛇の山か、魔の山か」ヨネ子の唇は青ざめ、後ろでゆるく束ねた髪が逆立ちそうになる。

「かんかん石のあたりだろうよ」あいかわらず寝転がったままで徳さんがいう。「春美と二人でクロウサギを追いかけていたから、きつとかんかん石のあたりだろう。なあに、遠くに行きやあしない」徳さんは草の上に腕枕をし、膨らんだヨネ子の下腹のあたりを眺めている。「そうかい、かんかん石のあたりかい、びっくりさせるんじゃないよ」ヨネ子は徳さんを睨み付け、悟を左手で邪険に抱えると、藪をくぐり原っぱの方に走り出した。

友紀夫も、この村の東の方には火の山と蛇の山と魔の山があることを知っている。

火の山はこのあたりが火の海だったとき、蛇の山は大地が揺れおどつたとき、魔の山は雹をまじえて黒く冷たい雨が降り続いたときにできた山だといわれている。

村の人たちは、この山ができてから誰一人山に近付いた者はいない。近付こうという者もないし、その山を間近に見た者もない。子供たちが行けるのはせいぜいかんかん石のあたりまでで、大人たちが行けるのはかんかん石からまる一

徳さんは、かじりかけの芋の鬚根をむしって、ほらと友紀夫に投げた。「わしらももうすぐ十一年になる」徳さんは、焼けてひきつれたあとの残る頬を泥まみれの手でこすつた。徳さんの頭の毛はまばらで、白い薄みたいに垂れ下がっている。それに、頭のとつぺんところが手の平の大きさほどに禿げて、土の色よりも茶色つぼく光っている。

友紀夫は、徳さんの投げてくれた芋を二つに折って、大きい方に歯をたてた。歯をたてた途端に、きめの細かい芋の肌が友紀夫の舌をはねかえした。

「うめえ」友紀夫は、頬ばつたままでいった。甘い。硬くて冷たくて、涎が一本抜けかかつてぐらぐらしている前歯の間からあふれ出てくる。

「うめえだろう」徳さんはいった。「しかしだな」と、徳さんはその後をいにかけてやめた。いつもこうである。もう十年になる、というときの徳さんは、決まっただけを懸念に思い出そうとしている。

それは、半眼に閉じてはいるが、中心に寄つた黒目がときどき膨らんだり縮んだりする気配でわかる。「しかしだな」徳さんはもう一度いったが、思い出すのをあきらめたのか、ゴロリと草の上に転がった。

「ユキちゃん、友子を知らないかい」岩の陰から、ヨネ子が顔を出した。胸には生まれたばかりの悟を抱いている。「知らないよ」友紀夫がいう。「知らないかい、もうずつといないんだよ。悟の守りをほつたらかしてさ、いつたいてどこおほつていてるんだろ」ヨネ子は額に青筋をこしらえ、金切り声

日歩いた天狗岩まで、と決まっている。

行つちやあならんのだ、とみんなの腹の中にいつの間にか恐れが植え付けられている。

しかし、ただ一つ、いやただ二つの例外がある。一つはこれ八年ばかり前、二十になつたばかりの次郎が、天狗岩を越えて東に踏み入つたという。すると、いきなり火の山が火を吹き、蛇の山がうねり、魔の山から鉄砲水が走つたというのである。次郎は、鉄砲水がやっと引いた日の朝、天狗岩の傍の銀杏の枝に、焼け焦げて溶けかけた体のままに刺し貫かれ、目玉をくり抜かれて死んでいったという。

もう一つは権造爺さんで、次郎のことがあつて、ちょうど一年目の新月の晩、（行け）というなにものかの声に引かれて村を発ち、七日目の晩に火の山の頂きに立つたのだそうだ。そして、七日七晩の間頂きの岩に飲まず食わずで座り、無事に戻ってきたという。

権造爺さんは村に帰ってきたその朝、村の衆を前に、「火の山の主は、こういわれた。（振り向くな。振り向いてはならぬ。お前たちは選ばれた者たちである）こう火の山の主がいわれたとき、わしは地にひれ伏したのじゃ」といった。権造爺さんは、その日以来、床を高く上げたカシの木の小屋に一人で住んでいる。

友紀夫は、ときどき梯子を伝つてカシの木の小屋を覗き込むことがある。権造爺さんはたいい火の山の方に向かって座り、独りごとをいっている。膝の前には、カシの木をくり抜いた椀に、ゴマの油とぶどう酒がなみなみと注がれて置い

である。権造爺さんは、めったなことではカシの木の小屋を降りてこないのであるが、どうかすると、これもまたカシの木の杖に白い髭をからませながら、原っぱを歩いていることがある。原っぱには土筆が萌え、ぜんまいが背伸びをしている頃である。

「火の山は赤いか」子供たちがぞろぞろ後ろを歩く。

「蛇の山は高いか」

「魔の山は寒いか」友紀夫たちが訊く。が、権造爺さんは答えない。怒っているとも笑っているともつかぬ顔で、子供たちの一人一人をたじつと見詰める。

「火の山は赤いか」子供たちは、同じことを繰り返す。なぜなら、〈子供たちは、かんかん石より東に行つてはならぬ。大人たちも、天狗岩より東に行つてはならぬ〉という掟を定めたのは、権造爺さんであることを知っているからである。

「蛇の山は高いか。魔の山は寒いか」子供たちは権造爺さんの髭にぶら下がり、杖にすがりつく。権造爺さんはそれでもなにも答えず、ゆつくりと原っぱを歩いて行く。

「このたわけめが」ヨネ子がキイキイ声を出す。悟を片手にぶら下げ、行っちゃあならんとあれほどやかましくいつてたのだら、と友子と春美の尻を竹の棒でピシと叩く。友子と春美の尻はもう何本もみみず腫れができて、小さい春美はワアワア泣いている。

「だって、トモちゃんが行こうといつたんだあ」

「本當かい、友子。お前の方が二つも姉ちゃんだろ、どうし

そういつている。由加は、文江よりはずつと若いけれど、いつも大儀そうにしている。食も細い。男たちが稼いでくる獲物を、ヨネ子は待ち構えていたらげるのであるが、由加はどうかすると一口も手をつけずに子供に与えてしまうときがある。

男たちは七人いる。一番の年長は権造爺さんである。権造爺さんの年齢は誰も知らない。が、とうに百は越えている筈だと徳さんはいう。次は徳さんである。多分、六十歳ぐらいにはなるに違いない、と徳さんは頭をひねりながらいう。徳さん自身が、十年以上昔のことは全く覚えていないからである。あとは、宝田が五十四、五歳、純一が四十歳ぐらい、良則と良久が双子の兄弟で、三十四、五歳、哲也が三十歳ぐらいというわけである。だから、七人のうちで三人の女をほらませることができるとは、宝田以下の五人ということになる。

この五人は一つの小屋に住んでいて、夜になると思い思いの女の小屋にしのでいき、そこで種を入れることになっている。もつとも、村には権造爺さんのつくった掟があつて、〈稼ぎのない者は、女に種を入れてはならぬ〉ということになつているが、自分の持ち分の仕事をし終え、女子供たちに分け前の獲物を与えさえすれば、いつでも入れることができる。ただし、〈火の山の方にだけは、足を開いて種を入れたら、宿したりしてはならぬ〉ことになつている。

子供たちは、自分の母親が誰であるかわかつていても、父親が誰かわからない。そんな必要もない。良則や哲也の子供ではなく、村の子供だからである。友紀夫も、自分の母親は

てそんなことぐらいわかんないの」また一つ友子の尻が鳴る。友子はうなだれたまま、泣きそうになるのを必死でこらえている。「このあまつたれ、しつこいんだからねえ。え、なんとかいつたらどう」まずまずヨネ子は居丈高になる。その度に左手の悟がずり落ちそうになり、やつと下腹の出っ張りにひっかかつてとまり、ヒイと泣く。ヨネ子の下腹には、悟の下の子の種が宿っている。

徳さんはヨネ子の下腹を何度となく見上げる。次郎が死んだんじやから、これだようよう二十八人目か、と小さくつぶやく。徳さんはこの村の人数のことをいつているのだ、と友紀夫は知っている。この村で最初に生まれたのが友紀夫だから、今度生まれてくる子は友紀夫から数えて十八番目の子になる。子供は多いほどいい、と徳さんはいつもいう。

村には女は四人いて、それぞれが小屋をもっている。そのうちの一人は島津さんといって、もう権造爺さんと同じくらいの齡だから、子供を生めるのは文江、由加、ヨネ子の三人だけである。

文江は七人、由加は四人、ヨネ子が一番若いのに六人生んでいる。しかし、文江は最初の七年の間に七人生んだきりで、この三年というものは腹を膨らませる気配がない。島津さんに比べるには及ばないけれど、文江はこの三年のうちに急に老け込んでしまった。どうかすると、土間の丸太にすがりついて立ち上がる姿を見ることがある。

それからみればヨネ子はあと四、五人は大丈夫だ、と徳さんはいう。一番頼りになるのはヨネ子だ、と男たちはみんな

文江であり、同じ文江から生まれたのは雄次や康太や恵美であるとかわかつている。しかし、自分の父親が誰なのか知らない。もしかしたら、文江でさえも知らないのではないかと思っている。子供たちは、自分の母親の小屋に住み、眠る。

友子が、足をひきずりながら友紀夫たちのところによつてきた。白い尻の肌には、幾筋にも盛り上がった竹の棒のあとがある。ところどころ、赤く切れて薄い血がにじみ出した筋もある。

「ちよつと待つとれよ」そういうと、徳さんは川の土手まで這い下りて行つた。そして、青草を千切つて、息を弾ませながらまた這いのぼつてきた。「心配するな、これでじきに治る。ちよつとしみるがな」と、その草を手の中で汁が出るまでもんで、友子の傷に貼りつける。

「かわいそうにのう、もう五年もすれば立派に子供が生める体じや。大事にせんといかんのう」徳さんはその傷をまぶしそうに見て、青草をていねいに貼りつけていく。友紀夫は、徳さんはなんでも知っていると感じながら徳さんの手元を覗き込んでいううちに、体の芯のあたりがふうつと熱くなり、意識が遠のきそうになるのを感じた。

それがふいに起こったので、なにがなんだかわからないままあわてて友子の白い肌から目をそらした。意識はすぐに元に戻り、体の芯の熱さもうそみたいに去つていった。

「余計なことするんじゃないよ」後ろにつんのめりそうな足音がしたかと思うと、ヨネ子の金切り声が降つてきた。

「なにやってるんだよ、このスケベ爺い。この子をいつたいたいどうするつもりだ。まさか、種なしのくせ、おもちゃにしようってんじやないだらうね」ヨネ子が徳さんに詰め寄った。「あんまり傷がひどいもんで、ほら」徳さんは、草の汁に青く染まった手の平をヨネ子の目の前にさし出ししながら、しどろもどろになる。

「へんないいわけをするんじやないよ。けつ、油断も隙もあつたもんじやない。第一、余計なことするんじやないといつてるだろ。この子はね、かんかん石のずつと奥まで行つて、火の山に向かつて石を投げてきたつていうじやないか。罰当たりだよ。なに、あたいの子。子供は村の子だと決まつてるだろ。火の山が怒つたら、いつたいどうする。徳さんも徳さんなら、友紀夫も友紀夫さ。ふん、なんの稼ぎもせずただ食らうだけ食らつて、子供の面倒ひとつみれないつてんじや、あきれてものもいえやしない」

ヨネ子は、すごい剣幕でまくしたてる。左手には悟をぶら下げ、右手には友子たちを打つた竹の棒をひきずつてゐる。

働くことができない徳さんは、村の子供たちの遊び相手をする役目になっている。足が不自由な徳さんは、子供たちの速い動きについていくことはできないから、原っぱの岩の端に座つて、子供たちの姿を目で一日追うのである。

まだ幼い雄次や恵美たちが川の深みに入りそうになつたり、草の向こうに見えなくなりそうに遠ざかると、大声で呼び返さなければならぬ。

友紀夫はまだ十歳だから、大人の働きはできない。ときど

せに、といわれると、分け前の獲物をそつとおいて広場を出て行つてしまふ。なにも好き好んで歯だけが丈夫なわけではない、と徳さんはいつか友紀夫にもらしたことがある。

この頃の徳さんは、半眼に目を閉じ、唇をひねくりながら、いつもなにかを考えている。むうつ、とうなるかと思えば、おうとひとみを輝かしたりする。しかし、またすぐに元の難しい顔に戻つてしまふ。「こらあたりひつかかつて、どうしても出てこんのじゃ」と喉のあたりをかきむしるときもある。「たった十年前のことじゃ」と深い溜め息をつき、ついにはあきらめてバタリと草の上に転がつてしまふ。荒々しく息を吐き出す徳さんの胸の上には、むっくりした雲がゆつくり流れて行く。

「友子、どうしてかんかん石の向こうまで行つたの」

「自分でもわからない。クロウサギを追いかけて、良則さんに教わつたとおりにクロウサギの頭をねらつて石を投げつけたの。石は当たらなかつたけど、もうちよつとどつたのよ。春美と二人で悔しがつたら、母ちゃんが呼ぶじやない。誉められると思つたのよ。だつて、せつかくのごちそうが目の前だつたんだもの」友紀夫はうなずいた。クロウサギの丸っこい味が、つうつと舌の先に走つた。「俺が見つけていても、きつとかんかん石まででも、天狗岩まででも追いかけたらどろな」と、友紀夫はいった。

クロウサギは、芋よりもどんな木の実よりも、良則たちが捕まえてくるノブタやイタチや、哲也がひきずつてくるナマ

き純一や哲也と一緒に芋を掘つたり、ギンブナを運んだりすることはあつても、それは仕事ではない。半日もかかる上の池に行くときなどは、足手まといになる、とすぐに追い返されてしまふ。だから、友紀夫も徳さんと一緒に、原っぱの岩の陰に殆ど一日座つてゐる。

ヨネ子がひとしきりわめいて友子を連れて去つた後、徳さんは気の毒なくらいにしょげかえつてゐる。しかし、しばらくして無理もないさ、と元の顔に戻ると、子供たちは村の宝だからな、その宝を生めるヨネ子のいい分の方がもつともなのじゃ、と真白い歯をみせた。

徳さんの歯は、あまり人には見せたくないのだが、親指と人差し指の先で軽くこねると、ポンと音をたてて歯の全体が歯茎を残してはずれてしまふ。それは、まるで歯の化物というべきで、薄い花片みたいなものの上に並んで真直ぐに立ち、キラキラ光つてゐる。

徳さんは、なぜ自分の歯だけがいつまでも真白で、はずしたりはめ込んだりできるのか不思議でならないという。権造爺さんは、口元がしぼんでいるからきつと歯茎だけの筈だし、宝田は眠れないほど奥のほうが痛むといつて自分で力まかせに抜いてしまつたが、それつきり生えてこない。ヨネ子や文江の歯もずい分隙き間だらけだし、男の中で一番若い哲也の歯だつて黄色く汚れて、すり減つたのが何本もある。

だから、この村で歯が白くて立派なのは、徳さんと子供たちだけということになる。食らうだけ食らつて、といわれると、徳さんはこの歯のことを真先に気にする。働きもないく

ズやギンブナよりもずつと上等の獲物である。徳さんも徳さんだ。友子と春美がクロウサギを追いかけてゐるのを見かけたら、自分にも教えてくれたつていいではないか。

「俺、だつたら、絶対天狗岩の向こうまででも、火の山のふもとまででも追いかけたらうな」友紀夫は、友子にいった。

友子は、草の上に座ると傷が痛いからといつて、座らずに中腰でしゃがんでいる。そして、「もうあたし、かんかん石には絶対行かない。火の山が怒つたらどうしよう」と、膝頭を震わせてゐる。

「そんな恐いことないよ」友紀夫がいう。

「だつて、次郎さんという人が火の山に近付いたら、ひどい罰が当たつたつていうじやないの」

「あれは昔のことさ。それも、この村を逃げ出そうとしたからじやないか。友子とは全然違うよ。それにさ、元はといえは権造爺さんがつくつた掟じやないか。権造爺さんに行けるものを、俺たちにだつて行けないことはないよ」

「そうかもしれないけど、母ちゃんに呼ばれ、火の山からかんかん石まで戻るときの恐さといつたらなかつた。足が縮こまつて、まるでアリかミミズになつたみたいだつた」

「それは、多分気持のせいなのさ。火の山のことか頭にしみ込んじまつてるから、とんでもないお化けに見えるのさ。俺はな」と、友紀夫はいいかけて口を噤んだ。そして、注意深くあたりを見まわした。友子のほかに、誰にも聞かせたくない。前にも後ろにも誰もいないのを確かめると、「俺はな、いつか火の山を越えて、火の山の向こうを覗いてみるんだ」

と、ボソツといった。その途端、友子の体が一瞬ビクンと震え、二、三步とびすきつたかと思うと、肩をすぼめてうつむいてしまった。

夕方になって、男たちが村に戻ってきた。宝田は山ぶどうや木の実や柿の実を、純一は芋や野菜を、良則と良久はノブタとノウサギを、哲也はギンブナとヤマメを重そうにかつぎ、あるいはぶら下げてきた。

それを待ちかねていた女子供たちが、ワツと男たちをとり囲む。ノウサギは良久の獲物なの。この頃のノウサギ、少し痩せているのね。純一の芋は硬くてとでもしまりがいいわ。あらつ、久しぶりのヤマメ、これはこれはご馳走さま、などと女たちの品定めと軽口が始まる。女たちの反応が、その夜、男たちがしるんでいく女の小屋を決めることにもなり、飲めるぶどう酒の量にもつながってくる。だから、男たちも獲物を放り出して、のんびり男たちだけの小屋で寝そべっているわけにはいかない。

「こいつは藪の中に逃げ込んでしまつて、棒で突ついても出てこんのだ。そいつを、五発目の石でしとめたさ」

「下の池にはギンブナはとんと見かけなくなつてな、それで半日も歩いて上の池まで行つてみたさ。それでもやつと二十尾だ。もつとも運よくヤマメの群に出くわしたからよかつたものの、明日は全然お目にかかれんかもしれん」と、身振り手振りで今日の戦果を熱っぽく語る。女たちはいちいちそれにうなずき、だつたらこのギンブナは日乾しにして大事に

カマドの分を子供の頭数に合わせて分け始める。宝田は獲物を分けたり足したりすることには頭の切れる男で、ほぼ平等に分け与えた後、ヨネ子のカマドに必ずお手盛りを加えるのを忘れない。それは、どうかすると文江の二倍ぐらいにもなり、由加の五倍ぐらいになる時がある。

最後に宝田は、小屋もカマドもたない徳さんに、くず芋とヤマメを一、二尾投げてやる。徳さんは地べたに寝つ転がつたままで分け前をつかみ、いざりながら自分の棲み家に戻つて行く。徳さんの棲み家は、木の小屋ではなく、岩の裂目をくぐつて入るほら穴になつている。

ほら穴に戻ると、手探りで火打ち石をつかみ、それを鳴らして枯草に火花をとばし、ノブタの内蔵からしぼりとつた脂にひたしたヨモギの芯に火を点ける。ヨモギの芯が勢いよく燃え上がると、その火に枯枝をかざし火を移す。徳さんは枯枝のはぜる音に目を細め、もらつたばかりのくず芋を炎の下に埋め込み、ヤマメを灰の上に並べる。そうしておいて、ほら穴の窪みのところに入れておいた硬い木の実をひとつまみとり出し、それを真白い歯でガリリとかみ砕きながら、また地べたに寝そべつてしまう。

ヒヤツヒヤツと、どこかのカマドが騒いでいる。おそらくヨネ子の小屋なのだろう。ぶどう酒の分け前も一番多いから、宝田や良則や良久たちが、酔いつぶれるほどに飲んでいるのかもしれない。

良則は、酔つ払うと歌を歌いだす。(オドミヤアボンギリ

しなければとか、ノブタもまさかのためのために煙蒸しにしておこうとか、知恵を出すのである。

女たちの中では文江も口を出すけれど、ヨネ子が一番の采配をふるうことになる。由加などは殆ど口を出さず、文江のことばにもうなずくし、ヨネ子のことばにもうなずく。だから、分け前の方も自然とヨネ子のカマドの前には多くの獲物が積まれ、その次には文江のカマド、その次には由加のカマドの順という具合になる。二年ぐらい前までは文江が一番であったのだが、いまでは次々に子種を宿すヨネ子の勢いには勝てない。

「さあ、まず火の山さんじゃ」と宝田がいい、それぞれの獲物のうちから少しづつ分けとつて、権造爺さんのカシの木の小屋にのぼつていく。宝田が権造爺さんの膝の前の筵にその獲物を置くと、権造爺さんは延近くににじり寄つて、火の山の方に向かい、頭がつんのめりそうになるほど三度ひれ伏し、なにやら呪文を唱え始める。

「次は島津さんじゃ」カシの木の小屋から降りてきた宝田は、火の山さんのときよりはいくらか少なめに獲物を分けとつて、島津さんのマキの木の小屋にのぼつていく。島津さんのマキの木の小屋は権造爺さんのカシの木の小屋よりは低い、真直ぐなマキの木で造られているので、どうかするとカシの木の小屋より見栄えがする。宝田が島津さんの膝の前に獲物を置くと、島津さんも額をすりつけて三度ひれ伏し、権造爺さんとは違う呪文を唱え始める。

宝田はマキの木の小屋から降りてくると、今度は女たちの

ボンギリ、ボンカラサキアオラントオ」と、その繰り返しかりである。いつか、友紀夫が「それなんの歌」と訊くと、「知るわけねえよ」と良則はいった。「なんだか知らんけんど、勝手に口からとび出してくるのさ」と面倒臭そうにいい、またそのところを歌いだした。

友紀夫は、まだぶどう酒を飲んだことがない。大人になつてぶどう酒を飲むと、そんな呪文みたいなものが口からとび出してくるのだろうか、と思う。ところが、良久は歌わない。歌わずに、踊る。左手と右手を顔の前で交互に振つて、腰をふらつかせながら小屋のまわりをまわる。良久は、それもなんの踊りだかわからないという。

友紀夫は、酔つ払うと手や足が勝手に動きまわることもあるのだ、と不思議になる。ところが、宝田は歌も歌わないし、踊りも踊らない。竹の筒に入ったぶどう酒を、ただ黙つてあおっている。そして、口の端に垂れた酒の雫をこぶしでぬぐつて、ヨネ子を膝の上にくいとひき寄せ、大きな乳房を撫でまわし始める。

文江の小屋には、純一も哲也もこない。由加の小屋の方はシンと静まりかえっているから、ひよつとしたら純一も哲也もヨネ子の小屋に行ったのかもしれない。文江は、芋の一切れとヤマメを半分ばかり口にしただけで、胸が「おどる」と顔をしかめ横になつた。康太も恵美も、文江にくつつき転がつている。雄次は眠つてしまったのか、小屋の隅に体をくの字に曲げ動かない。

友紀夫は、文江が眠つたら小屋を抜け出して、徳さんの岩

屋に行こうと思つてゐる。徳さんの岩屋は、原つぱを横切つた川の土手の上であり、何度か行つてゐるから、徳さんがこの時分になにをしてゐるのか大体見當がつく。

徳さんは、白くてひらべつたいものをとじ合わせたが厚い「本」とかいもの、ヨモギの芯の火に照らして、親指を舌の先でなめながらめぐり、それを覗んでゐる。友紀夫も徳さんの覗んでゐるものを見せてもらったことがあるが、それはなにかの呪文みたいなもので全体があふれていて、見てゐるだけで頭が痛くなつた。でも、そのところどころにギンブナに似た魚が泳いでいたり、火を吹き出している竹の筒や、ぼつかり浮かんだ月と並んだ緑色の丸いものが入つていたりして、本當にびつくりしたのだつた。

徳さんは、頬杖をついてこれをめぐりながら、ううむ、とうなるのである。

文江を見ると、ほんのいままで荒い息を吐いていたのがうそみたいに静かになつた。友紀夫はそうつと体を起こすと、息を詰めたまま入口まで這い、もう一度文江の気配を確かめ、するりと外に出た。外に出ると、のぼりかけた月がたれた赤さで小屋の上にかぶさり、数えることができないほどの星たちが金色の炎を放ちながら燃えている。

すぐ近くのヨネ子の小屋では、〈ボンカラサキアオラントオ〉という良則の太い声にまじつて、ヨネ子の甲高い笑い声が渦を巻いて空にたちのぼつてゐる。友紀夫は、足元からうつつらとした寒さがまつわりついてくる草叢の中で、〈子供が夜中に出歩いてはならぬ〉という権造爺さんの掟を思い

出し、しばらく立ちつくしてゐたが、耳をふさぐと、思いきつて川の土手に向かつて走りだした。

これで、掟を破つたのは何度目だろう。徳さんの岩屋の前に立ちながら、友紀夫は思う。掟を破つたうしろめたさと、明るい空の下を駆けてきた興奮とで息が乱れ、胸が縮んでしまふ。

本當に罰が当たるのではないか、といまにもなにものかが後を追いかけてくるみたいな気がして、いまきた原つぱの方を思わずこわごわ振り返つてみる。しかし、原つぱには、丈高く伸びた草の上に、月が赤い光を降らせてゐるだけで、なんの変化もない。なんの迫ってくる気配もない。が、それでも尻のあたりにじんとした緊張がきれぎれに突き上げてきて、その度に友紀夫の体をしばりつけてしまふ。

息を大きく吐いたり吸つたりしてゐるうちに、いくらか胸の動悸が治まつてきたので、友紀夫は思いきつて、ほんやり洩れてくる灯りを透かして、中を覗いてみた。原つぱからのかすかな風に揺れ動いている灯りの下に、膨らんだり縮んだりする黒い影が一つ、地べたにはりついている。黒い影の頭のとつぺんのあたりに、火の色に染まつた薄の髪が薄くそろりと垂れてゐる。徳さんである。

友紀夫は腰をかがめ、入口をくぐつた。入口は、友紀夫の肩ぐらゐの高さしかない。ムツとする臭いが鼻をつく。ノブタの臭いに似たツンとした臭いである。友紀夫が二歩ばかり踏み込んだところで、黒い影の徳さんも気が付いたのか、ゆ

つくり体を起こし、なんだという顔で「お前、まだ寝ないのか」といった。友紀夫が頷くと、「腹空いたのか」という。いいや、と友紀夫は首を振る。「じゃあなんだ」といいながら徳さんは、またゴロリと寝転がつた。

「お前、そう度々掟を破るもんじゃねえ」徳さんは、地べたの一点を覗んだまま、顔を上げようとしない。

地べたには、あの「本」とかいものが広がられていて、徳さんはそれをかみつきそうな目で見てゐる。傍に友紀夫がいることなど、まるで忘れてしまつたともいうふうに、顎を撫でたり、耳をひっぱつたりしながら覗んでゐる。

しかたがないから、友紀夫も徳さんの覗んでゐる本を覗き込む。そこには、得体の知れない小さなつぶつしたもの、夥しく並んでゐる。「それなに」と友紀夫は訊いた。徳さんは聞こえないのか、頬杖をついたままである。「なに見てゐるの」友紀夫はまた訊いた。徳さんは本を覗んだまま、「十年前じゃ」といった。

そういつて、手の平の木の実を一つガリリとかんだ。ガリリとかんで、うーむとうなつた。うーむとうなつて、もう一つかんだ。そして、「お前も食うか」と黒い実を友紀夫にもさし出し、「てんでわかりやしない」と、頬杖をはずして仰向けになつた。そのまま徳さんは目をつぶつてゐる。

が、しばらく経つて、「どうじゃ、お前も十年前のことが知りたいか」とにわかにも目を見開いた。その徳さんの目が突然友紀夫を見据えたので、友紀夫は口の中でゆつくりと転がしてゐた木の実をあわててかみ砕いてしまつた。

「どうじゃ、知りたいか」徳さんは今度は勢い込んでいった。友紀夫は、とつさのことなのでなにも答えないでゐると、徳さんは「いや、わしもなにも知つちやない。わしが覚えてゐるのは、ほんの十年よりこつちのことだけじゃ」と、ふいに息の抜けた声になる。しかし徳さんは、これも掟ではいつてはならんことになつてゐるが、と前置きして、「いづれお前も知らにやならんときがこようからのう」となんだかやさしい目になり、真白い歯を鳴らしながらゆつくり喋りだした。

「十年前のことじゃ。気が付いたとき、わしは権造爺さんを背負つて、見知らぬところに立つてゐた。火の海をくぐり抜け、大地の割れ目を縫い、雹の雨を避けて大岩の下に走り込んだところまでは覚えてゐる。いや、そこからあとのことは覚えてゐる、というべきか。その以前のことですつぱりわしの頭の中から抜け落ちてしまつてゐる。

とにかく、気が付いたときに立つてゐたのはいまの天狗岩の下じゃつた。少し落ち着いてきたのであたりを見まわしたら、島津さんがいて、宝田がいて、文江がいて、という具合なのだ。男が八人、女が四人の十二人、これが天狗岩の下でびしょ濡れのまま震えてゐた。権造爺さんときたら全くの老いばれでな、ものもいへんし足も腰も立たん。

雨が止んだので、わしらは恐る恐る天狗岩の下を出て、まる一日とちよつと歩いてこの村にたどりついたというわけじゃ。わしらは必死じゃつた。食わねばならん。住まわねばならん。十二人を十三人、十三人を十四人に増やさねばならん

のじゃ。その頃はわしが頭でな、朝は明ける前からノブタやギンブナを追いかけ、そして真夜中までかかって小屋を造つたのじゃ。権造爺さんは、ただ土間に転がって食らうか寝るかだけ。島津さんも食らうだけという具合だが、意外となんでもうまく運んでな。そう、最初の二年まではなにごとともうまくいっていた。

しかし、わしの足が立たんようになってきた。下の池でギンブナを追っているときに、足をすべらせて腰を石にうちつけてしまったのじゃ。わしが寝込むと、どういうわけか途端に毎日の獲物にもことかくありさまで、おまけに一番頼りにしていた、まだ二十になつたばかりの次郎が夜逃げをした。次郎のことは、お前たちも聞いてよく知っている筈じゃが、この次郎のことがあつてからというもの、村はさびれていくばかりじゃ。

しかし、ある晩、そう、次郎が夜逃げをしてからちようど一年目のことじゃ、足なえの老いばれだつた権造爺さんがすつくと立つた。権造爺さんは、そのままなにもかにひきずられるみたいに小屋を出て行き、みながすつかり忘れかけた頃村に戻ってきた。権造爺さんは村に戻ってきたその朝、カシの木を杖を手原つばに立ち、顎髭を風になびかせながら、村の衆を前に火の山さんの掟を宣べた。それもお前たちが聞いて知っていることじゃ。

その日から、この村にまた獲物が戻ってきた。権造爺さんがわしのあとの役目を宝田にまかせ、宝田も権造爺さんのことばを聞き、従つたからじゃ。役目の終わつたわしは小屋を

出て、このほら穴に入ったのだがなんの悔いもなかった。宝田は、わしにも由加にも、ヨネ子にも同じだけの獲物を分け与えた。権造爺さんの掟は守られ、生きていたのじゃ。

しかし、宝田のやり方が変わつてきた。なにごととも思うままになり始めた宝田にとつて、やつぱり権造爺さんは煙たい存在であつたのじゃ。

宝田は、かつての権造爺さんと同じく老いばれの、島津さんに目をつけた。島津さんをマキの木の小屋に住まわせ、火の山とは違つた銀の山を拝ませ、掟までこしらえさせた。そして、ヨネ子に近付き始めた。

だが、誤解してはならん。わしは、決して宝田を責めているのではない。宝田が変わり始めたのと、わしが十年前のことを考え始めたのがちようど重なるのじゃ。権造爺さんは、〈振り向くな〉といった。それは、誰よりもわしがよく知っている。しかし、いまのわしの頭には、十年前のことが、なにもか岩を打ち砕くみたいにこたましてる。

徳さんは、ここまでいいかけたとき、突然ヒイという奇妙な声をたてて、頭を抱え込んだ。そして、エビのかたちに曲がつた体の下に本を丸め込み、耳をおおつてうめきだした。指の間からは薄の髪が生きものみたいに揺れおどり、突つ張る。ヒイ、と徳さんはまたうめいた。激しい音をたてて歯を食いしばりながらうめいた。うめいた拍子に、あの薄い花片の上に並んだ真白い歯が膝元に転がり落ち、ふにやりとなつた口元から涎があぶくみたいに流れ落ちる。

友紀夫は、徳さんのこの突然の変わりように驚いた。徳さ

んがヒイと叫び白目をむいて体を震わせるたびに、恐ろしさで自分の心臓が止まりそうになる。「徳さんどうしたの」とやつとこのことで声をかけると、徳さんの体がたくりとんで、友紀夫の膝元に転がつたので、あわててとびすさつた。そのままほら穴の壁にはりつき、もう声をかけることも忘れて、友紀夫はただ徳さんを見下ろしているだけである。

友紀夫は、原つばの岩に腰を下ろし、春美や康太たちをほんやり目の端で追っている。春美は朝露の残る草の中で白い蝶を追いかけて行き、康太は土手の下の川の水にくるぶしまで入り込んでサワガニを拾っている。小さな春美の頭上を蝶はゆつくりとび交い、康太のくるぶしは水の中に斜めに折れて進み、進む度にキラリとした光の粒をこぼす。

徳さんは現われない。友紀夫が原つばにくる頃には、いつも徳さんは先にきて座っているのに、今朝は友紀夫の方が先だつた。友紀夫が岩の上に腰を下ろしてから、日は頭の真上までのぼつたのに、現われない。友紀夫の耳の奥には、あの徳さんのヒイという叫びが焼きつき、こびりついている。

昨夜、友紀夫はどうやって自分の小屋までたどり着いたのかわからない。徳さんが涎を流し、体を地べたにうちつけながら、行け行けと手の格好で合図をするのが、まるで反対に魔物が友紀夫の背中に爪をたててひきずり戻すみたいで、一歩も動けないのだつた。もし、徳さんの棒切れみたいに硬い腕が友紀夫を出口の方に突きとばしてくれなかつたら、そのまま朝まででもほら穴の壁にはりついて、震えていたかもし

れない。

「ううな、誰にもいうなよ」徳さんは熱い息の下からいった。「いうてはならん、誰にもいうな。いわねば、わしもお前も大丈夫だ。これが掟ぞ」徳さんは、丸まつた体の奥から声をしぼり出した。

眠れなかつた。朝の光が射すまで一睡もできなかつた。徳さんは、なぜ突然あんなに苦しみ出したのだろう。そう考えていると、頭の芯が痛くなつた。頭の奥の深いところに、ヤマメの骨が刺さつたのではないかと思えるほどの、細くてちりちりした痛みが耳のあたりをしめつけている。しかし、徳さんのことを忘れると、その痛みはうそみたいに止んだ。が、すぐに徳さんのいったことが思い出される。十年前に天狗岩の下で徳さんや文江たちが初めて出会つたということや、権造爺さんが足なえの老いばれだつたということや、次郎が夜逃げをしたということが、次から次に思い出される。すると、頭の奥にうつつすらし痛みがまた戻ってくる。

そんなことを何度も繰り返しているうちに、体が熱くしびれ、首のつけ根のあたりにこだまして鳴るドクドクという血の音にまじつて、〈振り向くな〉という声が、かすかに友紀夫の胸に落ちてきた。

徳さんは、わしは大丈夫だ、と激しい息の下でいった。しかし、本当に大丈夫なのだろうか。徳さんのいうことではずれたことは、友紀夫の知るかぎり一度もないのだが、あれだけ苦しんでいた徳さんである。頭をかきむしり、壁に打ちつけ、口からは涎を流し、手足を枯れ枝みたいに震わせていた。

もともと徳さんは、足を痛めて歩くにも不自由する体である。大丈夫だ、とはいったけれど、その声は胸の奥からようやくしぼり出した、声にならない声だった。そんな徳さんのことだから、あのほら穴を覗いてみようか、と友紀夫は今朝から何度思ったかしのれないのだが、やっぱりそれは恐ろしいことだという気がして近寄れない。

ヨネ子の小屋から、昼餉のカマドの煙が上がり始めた。芋を煮る甘酸っぱい匂いにまじって、干魚を焼く匂いが漂ってくる。由加のカマドからも煙が出てきた。同じ芋と干魚の匂いがするのだが、ヨネ子のカマドに比べるとずい分細い煙である。煮炊きする量が数倍も違うのだから無理もない。

文江の小屋からは、煙は上がらない。文江は胸が苦しいといつて昨夜から臥せているから、火を起こす気にもならないのだろう。考えてみれば、友紀夫は朝は山ぶどうを二、三粒口にただけで、あとはなにも食べていない。それなのに少しも腹が空かないのは、徳さんのことで頭がいっぱいだからなのだろうか。

ヨネ子の小屋から友子が出てきて、文江の小屋を覗き込んでみる。耳に片手をあて、うんうんとうなずくと、ヨネ子の小屋には戻らずに、原っぱの友紀夫の方に駆けてき出した。

友子が深緑色の草をなびかせながらよく晴れた青い空に白い足をはね上げると、草と空の境目のあたりに軽い風の輪ができる。友子は、原っぱに白い風の輪をいくつも転がしながら、大きくうねる草道を分けてきた。

ものをジャラジャラいわせながら、拾いあげている。

「どけどけ、勝手にさわると危ないものかもしれないぞ」友紀夫は春美たちを押しわけ、穴の縁から横穴に手を突っ込んだ。するとほんの一掻きしただけで、すくった泥と一緒に手の平いっぱい丸くて薄っぺたい硬いものが現われた。もう一度手を突っ込むと、やっぱり同じく手の平いっぱい丸いものが、乾いた泥にまじって現われる。だからすぐに、友紀夫の両手も、友子や春美や雄次の両手も、丸くて光るものでいっぱいになった。

「なに」春美が気味悪そうにいう。「石ころとは、全然違うよね」と雄次がいった。友紀夫にも全く見当がつかない。ヨネ子も文江も知らないものを、自分がわかる訳もないと思う。すると、「いままで黙っていたんだけど」と、友子も同じじ始めた。友子は両手にかかえていた丸いものを地面にじゃあとこぼし、奥の自分の寝場所にとび込んでいったが、すぐに戻ってきた。

「これ」友紀夫の目の前に突き出した手の平には、いま掘り出したものと同じ丸いものが一つのせられている。友子は、まぶしそうに友紀夫を見上げた。

「あんまり珍しかったんで誰にもいわずにしまっていたんだけど。これ、クロウサギを追いかけて行ったとき、かんかん石のむこうで拾ったの。石ころの間にスーと光るものを見つけたとき、胸がドキドキして息がつまりそうだった」友子は、少し頬を震わせながらいった。

「へエー、これが」友紀夫は、自分の手の中の丸い薄べった

息を弾ませて友紀夫の前に立つと、友子は「ユキちゃん、これ」と、小鼻をふくらませた。さし出した指の先には、丸くて薄い光るものをつまんでいる。

「こんなものが小屋の後ろの土の中からたくさん出てくるのよ」友子はいう。友紀夫が手にとってみると、カシの木の小屋を大きくしたふうな奇妙な建物の模様が入っていて、その反対側には、「10」という印がある。おまけに、ひっぱってもねじ曲げようとしても、びくともしならないほど硬い。

「なんだ」友紀夫は寝不足の目をこすって、何度も表と裏をひっくり返してみる。「さつきね、芋を埋めていた穴の横を掘っていたら出てきたの。それでもう少し奥を掘ってみたらいくつもいくつも転がり出てきたのよ。母ちゃんに、これなにして訊いても知らないというし、文江さんも知らないといつた。もうちよつと大きいのが小さいのはあるけど、みんなこんなに薄っぺたいのよ」と友子はいう。

「ふうん、面白そうだな」友紀夫はじつと見詰めている。見詰めていると、いままで徳さんのことばかり考えていたのが半分ばかり頭の中から出ていったのがわかる。

「こいつは、面白そうじゃないか」友紀夫は大声でいった。大声でいったときにはするりと岩からとび下りて、友子より先にヨネ子の小屋に向かって走り出していた。

ヨネ子の小屋の、芋の穴は大きい。両手を広げても届きそうもないほど巾のある穴の中には、ずんぐりした芋がいつぱいつまっている。その穴のまわりに子供たちが集まっている。穴の中には春美と雄次がいて、友子が見せた丸い薄べたい

いものと比べながら見詰めていたが、その「10」を一つ、原っぱの方に向けて力まかせに放った。友紀夫の手を離れた丸いものは、ヒュウと鋭く風を切っていったん高く浮き上がり、すぐに草の中に音もなく落ちた。

友紀夫はもう一つ、今度は東の方に向かって投げた。東の方に向かって投げたそれは、風を切る音もなく、どういうわけか友紀夫の指先を離れた途端、全く形も影も見えなくなってしまったのだ。

友紀夫は、その「10」が消えたあたりをぼんやり見やっていたが、ふと奇妙な感じにうたれてわれに返った。

「なにかある」突然、そう思った。徳さんの苦しみようとい、この丸いものとい、なにか得体の知れないものがあたりを埋めている。そう感じて、思わず体が震えた。なんだかわからないけれど、それは途方もなく恐ろしいことだと思ふ。なにがどう恐ろしいのかはわからないが、徳さんだったら知っているかもしれない。徳さんが覗いていた「本」の中にそんな丸いものが入っていたという気もするし、徳さんは毎日毎日目を半眼に閉じ考えているから、ひよつとしたらなにか本当のことを知っているかもしれない。友紀夫は、その丸いものを一つだけ指の中に握りしめ、徳さんの岩屋に向かって駆け出そうとした。

「権造爺さんだあ。権造爺さんが降りてきたぞお」そのとき、春美と雄次が叫んだ。見ると権造爺さんが、カシの木の杖に白い顎髭をからませながらゆつくりとカシの木の小屋を降りてきた。雄次が駆け出した。春美も駆け出した。しかたがな

いから、友紀夫もついて行く。友子はしばらく穴の縁に立っていたが、友紀夫の後ろに隠れて歩き出した。

友子がかんかん石を越えてクロウサギを追いかけたとき、ヨネ子から、権造爺さんに食い殺されるぞと叱られたため、友子は権造爺さん、と聞いただけで身がすくむのである。

雄次が権造爺さんをつかまえた。「これなに」雄次が丸いものを高くさし上げていう。権造爺さんは答えない。「これ地面の下から出てきたんだ、なに」雄次がもう一度訊く。権造爺さんは、いつもの怒っているとも笑っているともつかぬ顔で、雄次の傍をすり抜け、黙って原っぱの方に向かって歩き出した。

「ねえ、権造爺さんなら知ってるんじゃない」春美が権造爺さんに体をすり寄せた。権造爺さんは歩みをわずかに弛め、首を静かに振っただけで、またゆつくりと元の調子で歩き始めた。

その瞬間、友紀夫の背中にピツと鋭いしびれが走った。いきなり、体ごと宙に弾きとばされるのではないか、と思ったが、しびれはすぐに治り、喉の奥が少しイガつくぐらいで、体はなんともなかった。

しかし、ぼんやり立ちつくした友紀夫の足元から、いいよりのない恐怖が突き上げてきた。

友子を振り返ると、友子もどこか青ざめ、透きとおりそうな顔をしている。雄次や春美とは見ると、二人とも権造爺さんのことはもう忘れたみたいで、草の間から頭をのぞかせている赤い花片をむしっては、投げあっている。

の減りようはひどかった。

ギンブナを分けるときでもヨネ子に十尾、文江に三尾、由加に二尾という具合である。小屋のカマドでまかなっている人数は、ヨネ子が八人、文江が同じ八人、由加が五人なのであるから、文江の嘆きようはひどかった。「このままでは日乾しになっちまう」とうろたえ、果てには胸が苦しいといつて寝込んでしまう。どうかすると、カマドの種火を起こそうともせず、昼頃まで臥せっているときもある。

ヨネ子のカマドは、いよいよにぎやかになつた。毎日毎日宝田がすすわっているし、男たちがみんな訪ねてくる。男たちは、宝田が与える分け前のほかに、どこに隠していたのかノブタやノウサギをぶら下げてくる。それを丸焼きにして夜更けまで酒を飲み、歌い踊るのである。

「頭の芯が痛くて寝られないよ」その大騒ぎの度に文江が寝返りをうち、いまいましそうにつぶやくので、友紀夫はしかたなく起きてヨネ子の小屋を覗く。

ヨネ子の小屋の中では、良則のほかにも純一や哲也が、例の奇妙な歌を歌い、良久が踊りを踊っている。驚いたことには、ときどきは島津さんも隅の方に座っていて、ノウサギの骨を歯のない口でチュチュツツと音をたて、嬉しそうにすすっているときがある。

ヨネ子は宝田の隣の隣で、頭のとつぺんから出る声で笑い、まるで裂けるかと思われるほど開いた口でノブタの肉にかみつぎ、そして、まだ肉がびつりついたままの骨をおしげもなく火の中に放り捨てる。

ヨネ子が女の子を生んだ。

村の人数は、二十九人になった。女の子の名前は美紀という。これまでは、生まれてきた子供の名前は権造爺さんがつけることになっていたのだが、この子の名前は島津さんがつけた。権造爺さん以外の者が名前をつけたのは、これが初めてである。友紀夫は、宝田が島津さんに頼み込んで名前をつけてもらったのだ、と文江から聞いた。

美紀が生まれてから、宝田は獲物を捧げるときも、一番最初に島津さんのマキの木の小屋に上がるようになった。

島津さんは、同じ東の方でも、火の山も、蛇の山も、魔の山も拝まない。火の山と蛇の山の間にあるという銀の山に向かい、額をすりつける。唱える呪文も権造爺さんのよりは長く、そして高く低くうねっている。おまけに体全体を震わせ、鋭い気合いとともにマキの青枝をうち振る。

島津さんも掟を一つつくった。「銀の山は金の道」という。一つしかつくらなかつたのは、権造爺さんにくらか遠慮したのだろうか、と文江はいった。

島津さんが美紀の名付け親になつてから、宝田は働きには出ず、昼間からヨネ子の小屋に入りびたっている。それも、生まれればかりの美紀の傍には近寄らず、ぶどう酒をあおってはヨネ子の尻を撫でまわしてばかりいる。

宝田の分け前は、いままでもよりもつとヨネ子のカマドに多く、文江や由加のカマドに少なくなつた。由加の方は、もともと人数が少ないのだからしかたがないとしても、文江の方

友紀夫は、口の中にあふれてくる生唾を音をたててのみくだし、唇を手の甲で乱暴にこすり、懸命にとび出そうとする自分を押さえつける。そして、あんまり違い過ぎる、と思う。

実際、ヨネ子の小屋で食べたり飲んだりしているものの中身の違いといつたらない。同じノブタやノウサギでも肥えて太く、ぶどうの房もよく実っている。それに量が違う。愚痴つてばかりいていつも小うるさく思う文江や、腹いっぱい食べること知らずに眠っている雄次や康太たちが哀れに思えてならなくなる。

そんなことを考えながら、今夜も友紀夫は肌寒い小屋の入口に立っている。友子は、と見ると、騒ぎで眠れないのか、奥の暗がりできき白い首を伸ばしてヨネ子たちの方を見やっている。それを目にした哲也が、「お前なかなかいい女になるぞお」といいながら近付き、いきなり友子の尻をピシヤリと叩いた。友子は、首を伸ばし、目を見開いたままの顔ではね起きると、小屋の隅に転がり逃げ込んだ。

哲也は、「おつ、なかなかやるじゃねえかあ」とろれつのまわらない口でいい、右に左によるめきながら友子を追う。

それを見たヨネ子が、「バカ、子供に手え出すんじゃないよ」と叫んだが、「冗談だよ冗談」といい構わず追いつき、首を縮めてうずくまった友子の腰のあたりに手を伸ばそうとした。

友紀夫が、あの徳さんが青草を友子の傷に貼ったときに似た熱いずきを下腹に感じて、目を閉じたときである。ギャツと悲鳴をあげてのけぞったのは哲也だった。目を開けると友子が哲也の指に歯をたてている。それも、ノブタが崖下に追い詰められ、振り向いた勢いで男たちの手にした棒切れにかみつくとときみたいに、すごい形相で歯をたてている。

「離せ、離せ、俺が悪かったあ」哲也は、指を力まかせにふりほどこうとする。あまり力まかせにひっぱるものだから、友子の体が二度、三度と宙に浮き上がる。あいたあつ、と哲也が尻もちをついたときには、友子は哲也の傍をすり抜けて、小屋をとび出していった。

友紀夫は、小屋の入口で鉢合わせになりそうになった友子の後を追った。追い付いたとき、友子は原っぱの岩の陰にしゃがみ、震えていた。頬を伝って落ちる涙を拭こうとせせず、うつむいたままギクツ、ギクツとあえぎ声を洩らす。友紀夫はなんだか近寄り難い気になり、友子の前に突っ立ったまま動かないでいる。

膨らんだ星の光の下で見る友子の顔は、唇から流れ出た血の色と、それをとかす涙とで汚れ、青白く細って見える。小屋の方からは、「だからいったじゃないのよお」というヨネ子の甲高い声が遠く聞こえるが、誰も出てこない。

るかかあなたには、海という途方もない広がりがあるのだという。それがどれほどの広さであるのかわからないが、徳さんが空の広さほどあるのだぞ、と喋っていたからとんでもない大きさに違いない。

夕日は、その海に落ちるといふ。友紀夫が岩の後ろに両手を突き、足を揺らしている間に、空は火の色になり、やがてそれは木々を焼きつくすのではないかと思うほどに燃え始めた。友紀夫の頭も、手も足も、燃えるのだった。友紀夫が生まれる一年前、あたりが火の海だったときもこんなふうに燃えたのだろうか、と友紀夫は考えた。

木々の向こうに日が落ち、あたりが急に静かになった。あたりがしんとしてくると、息苦しさになぜか胸がドキドキしてくる。

友紀夫は口笛を低く鳴らした。しかし、友子がくるかもしれないという思いと、くる筈がないという思いが浮かんたり消えたりして、口笛はすぐに途切れてしまう。そんなことを繰り返していると、下腹のあたりが冷えてきて、小便を催してくる。その度に岩からずり下り、二、三歩走って股の間から小さく縮んだものをつまみ出し、草の上に水滴をこぼす小便には六回走った。星が一つ、二つと顔を出し、みるみる空いっぱい溢れてきた。ヨネ子の小屋では、いつもと同じ騒ぎが始まっていた。

「ユキちゃん」と呼ばれたので振り向くと、いつの間にか友子が立っていた。友子はすると岩の陰にすべり込み、友紀夫も岩から下りて友子に並んでしゃがんだ。「やっぱりきて

星の数が多くなった。友紀夫がそう感じるだけなのかもしれないのだが、確かにあたりが明るくなった。友子は昨夜と同じ岩の傍にしゃがんでいる。いまは、いつもの友子に戻っていて涙なんか流していない。やっぱり友子にはかなわないと友紀夫は思う。自分だったら、いつまでも気にとめてよくよしているのに、と感心する。

「今夜はなんともなかった」友紀夫が訊いた。「うん、大丈夫」と友子はいった。本当になんでもないことみたいに友子はいう。でも、なんでもないことだとしたら、夜更けにこんなところまで出てくる筈はない。

昨夜、黙って目の前に突っ立ったままだった友紀夫に、「いつもこんな夜中にここにきてるの」と友子は訊いた。友子の涙がまだ乾いていないときだったから、友紀夫の方がどぎまぎして、うん、と喋ってしまったのだった。

それっきり友子はなにもいわなかった。友紀夫は、いいということが口元まで出かかっているのになにもいえず、あいかわらず突っ立っていた。友子が小屋に帰って行ったあとも、そのままいつまでも原っぱに立ちつくしていたのだった。

今日は、夕食が済むと、友紀夫はすぐに原っぱにきた。昨夜、いつも夜中に原っぱにきてる、と友子にいったので、今日もきた。

小屋を出た頃には、原っぱの草はまだ青く光り、空には十分な白さが残っていた。友紀夫は岩の端に腰を下ろし、西の原の向こうの木々の連なりを見ていた。木々の続いているは

たのね」友子は弾んだ声で友紀夫にいった。

そのとき、友子の顔が友紀夫の耳にくっつきそうなほど近付いたので、友紀夫はあわてて首を引いた。しかし、なにか甘酸っぱいものが急に胸にこみ上げ、息が詰まりそうになった。一つ齡下の友子の体が奇妙に大きく感じ、反対に友紀夫の体はだんだん縮こまっていくようである。

「わたし、くると思ってた」友子が訊いた。うん、と友紀夫は縮こまったままボソツといった。「じゃ、ずっと待っていたの」友紀夫は、夕日が落ちる前から待っていたといおうとしたがやめて、「いいや」と首を振った。すると友子は急に笑い出し、「知ってるのよ」といった。

「ユキちゃんがまだ明るいうちに出ていくのを見てたの。ちょうど小屋の入口で、干しブタの肉を千切っているときだった。パツととび出して、ノウサギみたいに原っぱの方に走って行った。すぐにユキちゃんだとわかったわ。本当は、そのままユキちゃんの後を追いかけたかったよ。でも、母ちゃんがお腹が苦しいって寝てるし、悟をおぶっていたから追いかけれなかったの」友子は頭を少し傾げ、白い指先で鼻の頭を掻いた。

「ヨネ子さんがどうかしたの」友子の白い指を目の端で追いながら友紀夫が訊くと、「夕方まで脂汗を流してうなっていたけど、いまはお酒飲んでケロッとしている。でも、なにかという今度生まれた美紀が意地が悪いって、みんなに当たり散らすのよ。生むが生むまでこんなにイライラしてきつい思いをさせた子はいない。きつと鬼っ子だろうって、ガブガ

「ブお酒飲んであたしたちに怒鳴るの。それで、ろくすっぽお乳もあげないから、美紀は朝から晩まで泣いてばかりだし、宝田さんも昼間から酔っ払って美紀のお尻をつねったり、けとばしたりする。いままでこんなことなかったのに」友子は唇をすぼめ、首をうなだれる。友子みたいに恵まれている場合でも困ることがあるのだろうか。

「だって友子の小屋、食べるものはいくらでもあるし、大人はみんな集まってくるし」友紀夫が、あのヨネ子の子の小屋のにぎわいを思い起こしながらいいかけると、「それが嫌なの」と、友子が急に声を荒げた。

「大人の人がって、好きじゃないわ、誰もかれも。酔っ払っていつもわたしを追いかけるのよ。母ちゃんにした同じ手で、わたしの胸やお尻を撫でまわすのよ。嫌ったらない。どう思う、ユキちゃん。あんたもしたいと思う。そうよね、ユキちゃんだって男だものね」友子は、友紀夫が答えるのも待たずにくるりと背を向け、そういった。

友紀夫は、友子のいう男だものねということがどういことであるかは知らないが、自分も、大人というものには、なにか汚らしいところがたくさん詰まっているものだと思えてならない。ギンブナの分け前を一尾でも多くとるのに一生懸命だつたり、陰でひとの悪口をいったり、それに大人の男と女には、がまんできない動物の臭いみたいなものがまつわりについている。

友子は、自分のことをそんな男たちと一緒にだと思っているのだろうか。ひよっとしたら、自分にも宝田や哲也と同じ、

動物みたいな臭いがまつわりついているのかもしれない。それが、友子にはわかるのだ。

「ユキちゃんだって男なんだものね」友子は、もう一度いった。どこかほうけたみたいでいい声でいい、でも、とまたいいかけて、急に立ち上がった。立ち上がったと思つたら駆け出していた。駆けて行きながら、「でも、ユキちゃんだっていい」と切れ切れに叫んだ。

友紀夫も立ち上がっていた。しかし後は追わなかった。昨夜と同じに、そのまま草の中に突っ立っている。星の色がめまいがするほどに激しく輝り、頭の上を高く低くめぐった。月の光も、耳たぶを熱く濡らしてゆつくりと流れ、やがて西の空に落ちていった。

友紀夫は、友子もやっぱり大人になるのだと思つた。友子も自分も大人になり、動物の臭いみたいなものをまき散らすのだ。それは、なんだか悲しい掟なのだと思え、口笛を吹く気にもなれなかった。

「わしのいうことなどきかんのじゃ」徳さんが憤慨している。「宝田は欲がまわり過ぎてしもうた。もう、なにをいうても耳をかそうとせん。島津さんの掟に従つてやりたい放題、し放題じゃ。島津さんの掟も掟じゃが、なかに、宝田が上手に糸を引いてるのよ。やつは、朝から晩までヨネ子の子の小屋に入りびたりで、仕事にも出ん。おまけに、誰もかれもがヨネ子の機嫌ばかりとる。それもそうじゃ、誰だつて宝田に目をつけてもらいたいじゃからな。見たか、ヨネ子の子の小屋のたい

そうな獲物を。あれで毎晩毎晩狂つたみたいだに騒ぎよる。

それに比べ、文江や由加の力マドの淋しさはどうじゃ。日陰と日向ほどの違いじゃ。しかしな、これももとはといえは、わしのせいじゃ。責任は、このわしにある」徳さんは、ひきつれた顔を震わせ、草の上にひっくり返つた。「わしの後釜に宝田が選ばれたから、なんっていうのじゃないぞ。わし自身に責任があるのじゃ」と、すっかり痩せ衰えてしまった胸の骨をギクギク鳴らしながら、徳さんは溜め息をついた。

徳さんが原っぱに出てきたのは、あの岩屋でのことがあつてから、三日目の昼過ぎだつた。岩屋から背中を丸めよるけ出てきた男が徳さんであるとは、最初友紀夫にはわからなかつた。十年前、徳さんに背負われこの村に連れられてきたというその権造爺さんが現われたのかと、一瞬思つた。それほど徳さんのやつれようはひどかつた。薄の頭の毛は殆ど抜け落ち、痩せた手や足は地面の上を動きまわっているのが不思議なくらいに細く、目は落ち窪み、胸の骨はしなびた皮を突き破りそうに尖っていた。もし、真つ白に光るあの入れものの歯が口元から覗いていなかつたら、骨だけの猿が穴倉から這いずり出てきたのかと、見間違つたに違いない。

徳さんは、まる二日間にも食べなかつたという。体を半分起こすのも辛くて、食べる気にならなかつたそうだが。夥しい汗で、濡れとおつてしまった本が乾いていくのを鼻先に見ながら、ひしゃげた蛙みたいに寝転がっていたという。「ほら、これさな」徳さんは、左指を友紀夫の前に突き出し、みせる。左手の人差し指と中指の間がパツクリ裂けて、あ

とが黒いかさぶたでおおわれている。傷は、うめきながら岩の壁を掻きむしつたときに、知らないうちにできていたという。「血が手首を伝つて肘のあたりまで流れてな、地面の上にごよんとした固まりをつくつていてのを見て初めて気が付いたんじゃ。こんなにたくさん血がわしの体から流れ出たなんて、自分でびつくりしたくらいじゃ」徳さんは目を細め、他人事みたいという。「出るだけ出ると血も止まつてな。すると、気がすうつと遠くなつて眠たくなつたので、眠つてばかりおつた。眠つてばかりおると、腹も空かんのじゃよ」そういういながら、徳さんは黒い豆粒を真つ白い歯の隙間に一つ放り込むと、意外なほどの強さでガリリとかみ砕いた。

「次の日のことじゃ」と、徳さんはいった。「次の日、権造爺さんが広場に降りてきたじゃろ。真つ白い髭を杖にからませ、原っぱを歩いて行つた筈じゃ」徳さんは、かんかん石の方を指さした。友紀夫はすぐに思い当たつた。友子や春美や雄次たちと、ヨネ子の子の穴から掘り出した丸い薄つぺたい「10」を握つて、権造爺さんを追つたときのことである。

「権造爺さんは天狗岩を越え、火の山のふもとまで行つたんじゃ」「火の山まで」と友紀夫がいうと、「そうじゃ」と徳さんはなにかに思い当たるふうに、頭を二度、三度振つた。

「権造爺さんが戻ってきたのは、二十一晩目の夜じゃ。わしにはわかる。権造爺さんは左足の小指を一つつぶされて戻ってきた」「権造爺さんがどうして」友紀夫にはなにがなんだかわからない。「それは、掟を破つたからじゃ」徳さんはうめいた。そして、「掟を破つたのはこのわしじゃ」と吐き捨

て、ガクンと肩を落とした。

落とした肩で苦しうに息をつかい、徳さんがいったのは「本」に入っていることを思い出そうとすると、決まってよくないことが起こる、というのである。

「次郎のときもそうだった。次郎のときは、『竹の筒みたいなものの先から火煙が出ているの』を見ていて、なにかに思い当たったという気がしていた。わしが下の池で足をすべらせたときは、『何百という人間が空を走っているところ』を見ていた。宝田が勝手なことを始めたのは、わしが丹念に本の隅々まで覗こうとし始めた頃からじゃ。」

火の山の主は、初めに「振り向くな」といわれた。これは敵とした掟なのじゃ。ということとは、つまり、わしのもつておる本というものが、火の山の主の掟にそむいている、ということになる」徳さんはこれだけいうと、草の中に仰向けに寝て目をつぶり、荒い息を二度、三度吐いた。息を吐く度に、細く尖ったのどぼとけが、顎の下から胸の上までを行ったりきたりする。空に向けて立てた右腕の肘から先は、まるで枯枝みたいで、原っぱを渡るかすかな風にも揺れ動きへし折れそう、どころもとない。

「でもな」徳さんは、痰でもからまつたのか何度ものどぼとけを上下に走らせながら、しゃがれ声をしぼり出した。「でもな、わしはやつと決心がついたのじゃ。わしは、本を捨てん。捨てられんのじゃ、どうしてもな。それで、火の山の主に願いをたてた。わしのたつた一つの願いじゃ。一度だけ、振り向くことを許してくれ。中身は絶対に口外せぬ。絶対に

な。そのかわり、わしの身はどうなってもいい。焼かれようと、裂かれようと、どうなっても構わぬ。ただし、わしよりほかの者にはなんの関わりもないことじゃから、他の者への罰は及ばぬことにして欲しい。

そう、わしは岩屋の地べたにはいつくばって、東の方に向かい、祈った。とにかくわしは、『十年前』のことを思い出さんことには死んでも死にきれんのじゃ」

友紀夫は、徳さんがそういったとき、徳さんの体にどす黒い血の塊みたいなものが、空から抜け落ちてくるのを見た。その瞬間、原っぱの草という草のすべてをなぎ払う風が地中から湧き起こり、空からは、太陽の何倍もあろうかというほどの光の束が、稲妻となつて降ってきた。すさまじい音だった。すさまじい光と風だった。友紀夫は地べたに吹つとび、耳も目も口もふさいだままひれ伏していた。

しかし、それはすぐに止んだ。音と光と風が過ぎ去った後は、いまのが現実のことであつたとは信じられないほど空は澄み、原っぱの草はそろりともそよがない。友紀夫は夢でもみたのではないか、と首をひねつてみた。徳さんとは見ると徳さんはいかかわらず空に立てた腕をかすかに揺らしながら目を閉じ、草の中に埋まっているのだった。

その夜、珍しくヨネ子の小屋の騒ぎは始まらなかつた。

「どうしたんだろうねえ」文江が首を伸ばし小屋の入口の方を窺う。「友紀夫、友紀夫起きてごらん」と、文江が呼ぶ。

友紀夫は、呼ばれるより先に首を伸ばして、ヨネ子の小屋の

様子を窺っていた。

夕方、友子に会つたとき、母ちゃんが転んで向こう脛に軽い怪我をした、といつていた。友紀夫はヨネ子でも怪我をすることがあるのか、とちよつと小気味いい気持だったのだが、あれから小屋の様子がどこかいつもと違う。誰かが急いで駆け込んだかと思うと、今度はあわただしく出て行く。そして、すぐに二、三人がどやどやと走り込む。その合間に、ウウウッ、エエエという悲鳴に似た声が聞こえる。そんな具合で、もうかなりの時間が過ぎている。

「ユキちゃん、ユキちゃん。おばさん、いる」小屋の入口に友子のひきつれた声がとび込んできたのは、それからいくらかも経たない頃だった。「おばさん、おばさん、大変なの。母ちゃんが大変なの」と、いつもの友子に似ずオロオロしている。「どうしたのさあ」文江が体を起こしかけると、早くきて、早く」と泣き出しそうになる。

ヨネ子の小屋では、宝田も島津さんも男たちもみんな集まつて、土色の顔で横たわっているヨネ子を囲んでいた。そのヨネ子の唇から、殆ど力のない声が洩れるほかは、誰も口をきかず咳払いをしようともしない。

文江が、「いったいどうしたのさあ」と訊いても、聞こえているのかいないのか、誰も答えない。「で、どうなのさ」と文江がもう一度いうと、島津さんが力なく首を横に振つた。そうしているうちに、どうして聞きつけたのか徳さんもやつてきた。徳さんは入るなり、「約束が違う」とポツリと洩らしたが、その声を聞きとがめる者はいなかつた。

それからすぐに、ヨネ子は死んだ。

なにもいわずに、フツと息が止んだだけだった。友子と春美がヨネ子の体にとびつき、しがみついて泣いた。春美がヨネ子の腕をとつて、「母ちゃん、母ちゃん」といいながら強く揺すつたが、春美の手を離れたヨネ子の腕は、力なく藁の上に崩れていった。

ヨネ子は、男たちの手で村の北のはずれにある次郎の墓の横に埋められた。丸く土を盛つて、石を一つ置いた次郎の墓のすぐ隣に、同じ形に土を盛つて、同じぐらいの石のせられた。友紀夫も男たちの後に行つたから、ヨネ子の少し突き出した口元に、ざらざら土塊が落ちていくところまでしつかり見た。大人が二人ばかり入つてしまえるぐらいの穴にヨネ子がすっぽり納まつてしまうと、男たちは何度も何度も土を踏み固め、終わると土饅頭を盛つた。土饅頭は、次郎のより立派な形に出来あがつた。石も、川原から哲也がかつてきたのをのせた。

次郎の土饅頭は八年も経っているから、蔦や苔が生えてすつかりあたりの景色になじんでいるのに、ヨネ子のはどこかよそよそしい感じだけが際立つた。それに、一番のにぎやか好きだったヨネ子が、こんな村のはずれの淋しいところに埋められるのかと思うと、友紀夫は、これまであまり好きではなかつたヨネ子が、急にかわいそうになつてきた。宝田たちは、慣れた手つきで石の上からぶどう酒をかけ、「さあ、たらふく飲めよ」などといつてい

ヨネ子の腹には、八人目の子供が宿っていたという。その日は宝田と昼から飲んで、小屋の裏の土手に用を足しにいつて帰るとき、石ころにつまづいて転んだのだそうだ。「多分へべれけに酔っ払っていたのさ。昼間つから酒なんぞ浴びてるから、大事な種を流しちまうのさ」と文江は、罰が当たったのさ、といわんばかりにひとりごちている。

ヨネ子が死んでから、友子と春美は由加の小屋にひきとられ、悟や美紀は文江の小屋にひきとられた。ほんのいまのいままで一番にぎわっていたヨネ子の小屋には、誰一人住む者がいなくなつてしまつた。

男たちは、今度は由加の小屋に出入りし始めた。この村で子供を生める女は、もう由加一人しかいないのであるから、当然のことではあるが、これまで毎日ヨネ子の小屋に入りびたつていた宝田や良則たちも、さつさと由加の小屋にくらぐえしてしまつた。そして、ヨネ子の小屋のときと同じに飲んで、歌い、踊るのである。

獲物の分け前の方は、文江が四に由加が六ぐらいの分量で分けられた。宝田が広場で獲物を分けるとき、最初文江に多いぐらいの加減で積み上げるのだが、最後にはどうしても由加の方が多くなる。

というのは、宝田も、どちらかというあまり器量のよくない由加に与えるのが、それほど進まないふうである。由加にしてみれば、そんなことはどうでもよく、これまでの量に比べていっぺんに三倍にも増えたのであるから、最初のうちこそ文江に対して済まなさそうにしていたが、この頃で

は平然としている。

不思議なことに、分け前を多くもらうということが人の性格まで変えてしまうのか、以前のおとなしくひかえ目だった由加のそぶりは失せて、ことばづかいまでどこかヨネ子に似てきた。

「このあまつたれ」小屋の奥で由加が大声をはりあげる。これまで一度も聞いたことのない由加の乱暴な声である。小屋の入口では、友子と春美が芋の鬚根をむしっている。春美は何度もしゃくりあげ、友子も涙をこぼしそうにしている。

「もうお昼どきはすっかりまわつちまつたというのに、なんというのろまなの」と由加がいう。

「おい由加、あんまりガミガミ怒鳴るな。耳の傍でガミガミいわれると、酒がまづくなつてしまふ」と、奥から宝田がのつそり出てくる。「それより友子、そろそろお前も小屋を一つもたせてやつてもいい頃だな」宝田は友子の前にしゃがみ、友子の顎を撫で上げようとする。

すると、ピシヤリと由加の手が宝田の手を叩き、「冗談じゃないよ、この子が小屋をもつて。いったいいくつになつたと思つてるんだい、三年早いよ、三年」由加は友子を冷たく見下ろし、早くおし、と足を踏み鳴らしてせかせる。

「芋の毛をむしつたら、土鍋に焚きつけな。そして川から水を汲んで、それが終わつたら順子のお守りをしながら、西の原から薪を拾つてくるんだ。春美はギンブナを干し、そのあとは腰をもんどくれ」由加は矢継ぎ早に二人に仕事をいっけると、髪の根元に爪をたてて掻きむしりながら奥に引つ込

んでしまつた。順子とは、由加の一番下の子供で、二つになつたばかりである。

「トモちゃん、なんだつてあたしたちばかり怒られるんだろ」春美が泣きべその顔を、友子の顔に寄せる。「しつ、大声を出しちゃだめだよ。ここは母ちゃんの小屋じゃないんだから、じつとがまんするんだよ。しばらくがまんしてたら、そのうちあたしたちだつて、小屋をもてるようになる」

「小屋をもてるつて、小屋をもつてどうするの。お酒飲んで歌つたり、踊つたり、お尻をさわられたり」

「わかつてる。あたしだつて、嫌だよ。絶対嫌だよ、そんなこと。だけどさ、このままひとの小屋でいいようにこきつかわれ、いいようにいじめられて、毎日毎日泣いて暮らすよりいくらかはいいだろ」

「歌つたり、踊つたり、お尻をさわられたり。みんな嫌だ。たままない。こんな目にあうくらいなら、あるとき母ちゃんといっしょに北の谷に埋められるのだった」

「バカ、めつたなことをいうんじゃないよ。そんなことで母ちゃんが喜ぶと思うの。母ちゃん、負けず嫌いだつたから、そんな泣き虫がきてもきつと追い返しちまうに決まつてる。だから、もう少しがまんするんだ」

「でも、疲れたよ。もう、どうなつてもいい」

「だめだ、そんなに意気地のないことじゃ。母ちゃんが元氣だつた頃のことを忘れたのかい。もう一度、あの頃の自分にちに戻るまで負けちゃだめだと約束しただろ」

と、友子がいつたとき、「また内緒話をして仕事をさぼつ

てえ」と、由加が少しろれつをあやしくなつた声で叫んだ。

友紀夫は、友子たちを眺めていて、あまりの変わりように驚いている。ほんの何日か前まで、友子も春美もヨネ子の子供としてなにごとなく暮らしていた。それがいまは、友紀夫でさえも食べたことがない粗末なものを、小屋の隅で縮こまつて食べている。ヨネ子が死んで、二十と幾日しか経たないというのに。

そんな友子たちに比べると悟や美紀たちは、あのヨネ子の子小屋での毎日にはかなわないうが、文江の小屋の中では殆どわけへだてなくなんでも与えられている。文江にいわせれば、「一時は憎らしゅうも思つたことのあるヨネ子じゃが、死んでしまえば空気と一緒。まして、小さい悟や美紀たちにはなんの罪もない。日向から日陰に落とされた分だけ、かえつて不憫じゃ。わしは日向のことなど少しもわからんが、日陰には日陰のやり方がちゃんとあるからな」というのが文江の口癖で、友紀夫であろうと悟や美紀であろうと、同じものを同じ量だけ分け与える。

徳さんは、すっかり無口になつた。原つばの岩の端に背を丸め、ぼんやり東の方を向いて座つている。友紀夫が話しかけてもろくに返事もせず、ときどき黙つて遠くに目を移す。

第一、原つばに出てくることもまれになつた。岩屋の入口までいざり出た徳さんの姿を見かけたと思つたら、いつの間にかまた元の穴倉に戻つている。

徳さんの体の肉という肉は殆ど落ち、どうかすると権造爺さんよりも痩せて尖り、老いぼれてみえる。まるで、骨と骨

とが音を鳴らしていざり寄る。そんな格好で分け前のときも広場に現われる。

「あかんかもしれんな」徳さんがポツリといった。友紀夫には、それは徳さんがただうめいただけの溜息に聞こえた。「やっぱり、よした方がええかもしれんな」と徳さんは、今度は何んとか聞きとれる声でいった。しかし、なんだか口の中が糊でも固められているみたいで、甘ったれた声になる。

「なにが」友紀夫が訊く。徳さんは、閉じた目にヤニを浮かせて、いま自分がいったことなどもう忘れたという顔で、歯をガチガチ鳴らしている。

「なにかいった」また、友紀夫が訊く。徳さんは顎に流れた涎をゆつくり手の平で拭くと、ああ、と声にならない声でいい、頭を一つ揺らした。

村では、ヨネ子が死んでいくらもならないというのに、今度には島津さんが由加の小屋で倒れて、いまはマキの木の小屋で寝たきりになっている。

文江と由加がマキの木の小屋に上がって島津さんの世話をしているのだが、なにも口に入れることができず、下のものも垂れ流しだという。文江の話では、鼻筋が曲がってしまっているし、ただ鼻をかいて眠っているだけだから、もう長くはないだろうという。

「その晩は、ずい分派手にやったらしいんだよ。島津さんも日暮から夜中までゲップが出るほど食って、飲めもしないぶどう酒を二杯も飲んだというじゃないか。まあ、本人には極楽だったろうけどよ」と、文江はマキの木の小屋から戻る度

にあきれ顔でいう。

そうしているうちに、良久がノブタに体当たりを食わされ、はずみで崖下に転落して、幸いたいた傷ではなかったが、左腕を折ってしまった。働きに行けなくなった良久は、しばらく文江の小屋で預かることにし、文江が食事の世話から薬草の世話まで一人で面倒をみている。

「男の人の世話をするなんて、何年ぶりだろうねえ」文江は忙しく体を動かし、どこか嬉しそうに若やいでさえいるのであるが。

「やっぱり、わしのせいじゃ」徳さんは閉じていた目をにわかに見開き、のどぼとけを勢いよく上下させて、これまでの喉の奥にこびりついていたみたいなおとばがうそかと思えるほどの声で、そういい放った。「これ以上、もうわしも勝手な真似はできん」そういうと、徳さんはひよいと岩を下り、意外にしっかりと足どりで原っぱを横切り、岩屋に向かつて足早に歩き出した。

友紀夫が徳さんに遅れて岩屋の入口に着くと、中から徳さんの激しい息遣いが聞こえてくる。友紀夫は一瞬、徳さんの身になにかが起こったのではないかと思ひ、急いでとび込んでみると、真正面に徳さんのキョトンとした目があった。

あ、ああ、と徳さんはきまり悪そうに頬をくしゃくしゃにして笑い、「なに、もうあきらめたさ」と足元の本を顎で示した。徳さんの足元には、いくつにも裂かれてバラバラになった本の残骸が散らばり、足で踏みつけたのか、その半分ばかりが泥まみれになっている。

「じゃ、徳さん『十年前』は」友紀夫がいいかけると、「なあに、もうあきらめちまったよ」と徳さんは弱々しく首を振る。「わしの考えが甘かった。いやあ、とんでもない思い違いをしていたらしい」徳さんは、鼻水を何度もすすりあげて、徳さんは、火打石を打つ。前かがみの格好で、力まかせに打ちつける。そうすると乾いた火花がとび散り、やがて枯草からうつすらと煙のぼり始める。その煙に、本の残骸をさし込み、燃え上がらせる。

徳さんは、勢いのついた火の中に、足元に散らばった本のかたまりを引き千切り、次々に放り込んでいく。本の残骸の火の手は草の葉の灰と一緒に舞い上がり、天井で折れて横に広がり、ゴウという音を狭い岩屋中に響かせる。徳さんは続けざまに引き千切り、放り込み、火の音をうならせ、岩屋の壁を、天井を、徳さんの痩せた顔を、胸板を、赤々と染める。友紀夫は、徳さんが狂ったのではないかと思ひ、火の粉の迫る熱さもあって、少しずつ後ろに退がりながら徳さんの顔を窺っている。徳さんが、いまにも火の粉をつかんで投げつけるのではないかと考え、徳さんの仕種に少しでも変化がみられたら、すぐに岩屋をとび出す構えでいる。

「どうとう、徳さんがおかしくなったあ」と叫んで駆け出す自分の姿が、目に見えてくる。

村では、そのくらいに次が誰なのかを恐れている。「ヨネ子に島津さんに良久、いいや次郎が最初で徳さんの足が立たんようになったのが二番目じゃから、今度が六人目じゃ」などと、子供たちまでがその話をしている。

大人たちも、恐れをなして山の深くや川の上流には踏み込まなくなつたため獲物も減り出し、暗くならないうちに小屋に戻ってきて、酒を飲みけんかを始めた。そんななか、「徳さんがおかしくなったよお」と叫んだらどうだろう。ガチツと、硬いものが触れ合う音がしたので徳さんを見ると、徳さんの手に、あの花片のかげらの上に並んだ真っ白い歯がつかまれている。徳さんはしばらくそれをじつと見詰めていたが、いきなり火の中に放った。真っ白い歯を飲み込んだ火は、一瞬、火の粉を天井まで散らして燃え上がったが、軽く揺らいですぐに元の炎に戻った。友紀夫は、その炎の向こうに揺れる徳さんの顔を透かし見ながら、やっぱり徳さんはおかしくなったのだ、と思つた。

炎の中に揺れる徳さんの顔は、歯を失つたせいはいつべんに半分ぐらいに縮んでしまい、太く走るしわの間に、ゆるんだ口元がだらしなく開いている。

「徳さん、なんでそんなことするの」友紀夫が半分腰を浮かしたままいと、「これでな、これでいいのじゃ」と徳さんは顎をもしやもしやさせながらいった。そして、「これでな、これがかんべんじゃ」と虚ろな顔になる。「次郎もな、ヨネ子もな、島津さんも良久もな、これでな、これがかんべんじゃ」そうつぶやいている徳さんの目から、涙がスーと顎の先を伝い、尖つたあばら骨の上に、一粒、二粒と落ちた。

良久の左腕は文江の世話がこまめだったせいとか、思いの外早く快復した。「もうノウサギの一羽ぐらいぶら下げても大

丈夫だ」と、暇があれば小屋の外で腕を伸ばしたり縮めたり振りまわしたりしている。

傍に文江が目を細めて立ち、「あんたあひよつとしたら八人目ができたかもしれないよ」と、良久の耳をつつく。「本当か、おいまさか」「間違いないよ、きつと。それに今度こそは絶対、良久の種だよ。でも、変なものだね。これまで七人も生んだのに、誰の子なんだかちつともわかりやしない。それがこんなどきどきでできたのに、はじめてはつきり種がわかるなんてね」文江は、まるで五つも六つも若がえつたみたいに声を転げさせて笑う。

「それにこれまでの悪いこと、全部徳さんのせいだというじゃない。徳さんが火の山さんの掟を破っていたからヨネ子が死んだり、島津さんが倒れたり、良久が怪我をしたりしたというじゃないか。でも、徳さんはなにもかも始末してしまつたというから、あとは大丈夫。あんなことは、もう起こりつこないよ。だけど、考えてみたら、良久が怪我をしたおかげで子が授かつたんだもんね。喜んでいいのやら、なんだか複雑な気分だよ」文江はよく喋る。つい先日まで、小屋の丸太にすがりついてやつと立ち上がったたり、胸がおどるといつて寝込んだりしていた頃は全く別人である。

「もう、あんなことは起こりつこないよ」文江がいうとおり、島津さんの方もすっかり意識をとり戻し、また床に臥せつてはいるものの、食べるものもどうかすると日に四度も五度も欲しいという。少しやわらかめに煮た芋を、自由のきく方の手で握りしめ、ピチャピチャ音をたてながら瞬く間にすす

り込んでしまう。

長い間落ち込んでいた獲物の量も、以前より多く、それも質のよいものが獲れるようになった。上の池まで行かねば獲れなくなっていたギンブナも、下の池に湧くようになったし、太ったノウサギやノブタも罾にかかつてくれた。分け前のときも広場には活気があふれ、宝田は以前みたいに勢いよく獲物を盛る。

友紀夫は、広場ででも原つばでも、いつも友子の姿を目で探す。ヨネ子がまだ生きていた頃の友子は、どちらかというところ勝気で、どこかひとを見下しているふうなところがあつて、たまらないほど好きという具合ではなかった。でも、友子には、簡単には手が届かないという不思議な輝きがあつて、色白のはっきりした顔立ちには、明るい原つばの緑や水色の空によく似合つていた。

そんな友子が、殆ど小屋から出てこなくなつた。夕方の広場には、由加と由加の子の隆がいつも出てきて、宝田の膝近く座つていて、友子は夜の原つばにも出てこないし、川の土手にもずつと姿をみせない。

どこか具合でも悪いのかと思ひ由加に訊いても、どうもしゃいまいよというばかりで、なにもわからない。それなら自分から由加の小屋に入り込んで行けばよいのだが、それができない。これはどうしたことだろう、と自分でも不思議に思う。以前は、いつも朝から晩まで一緒に遊んでいた二人であるのに、この頃どういうわけか、友紀夫のなにかが友子を避けている。そのくせ、突然、火が点いたみたいに友子のこ

とが気に掛かりだす。そうなるとうちも喉を通らなくなり、空を身上げた、だけで胸が苦しめて、涙がこみ上げてくる。

「ユキちゃん」と呼ばれたのでびくりにして振り返つた。友子の声かと思つた。しかし、後ろに立つていたのは春美だつた。春美の声は、驚くほど友子の声に似ている。友紀夫は、春美だつたことで、潤んだ目を友子に見られなくてよかつたとホツとした。

「トモちゃんが大変なのよ、トモちゃんが小屋で」春美は、友紀夫の顔を見るなりいつた。そして、友紀夫の手をつかむと走り出した。

「小屋つてなんのこと。トモちゃんがいつたかどうかしたの」友紀夫が訊く。「殴られたり、蹴られたり」「誰に」「宝田さんが用事をいつつけて、母ちゃんの小屋に連れて行って、それで」

ヨネ子の小屋の入口から、暗い土間を覗くと、ツンと黴の臭いが鼻を刺した。暗さに慣れない友紀夫の目には、小屋の奥にあるものがすぐには見えない。そのままぼんやり眺めていると、うつ、と友子の声が間近で聞こえた。目を凝らしてよく見ると、友子が小屋の奥の丸太を背にして小さくうづくまつている。

「トモちゃん」友紀夫が駆け寄ろうとすると、「寄らないで」と友子が鋭く叫んだ。「どうしたの」友紀夫が立ち止まると、「近寄らないで、お願い」と友子がもう一度叫んだ。友子は、乱れた髪を逆立て、涙と煤とに汚れた顔にうつすらと血をにじませ、二つの膝を抱いて、ほうけたみたいに座つ

ている。

友子のことがあつたその夕暮、権造爺さんがカシの木の小屋を降り、広場に立つた。最初に権造爺さんを見つけた雄次郎の声で、大人や子供たちが広場に集まつてきたが、権造爺さんは怒つているとも笑つているともつかぬ、いつもの顔でひとわたりみんなを見渡しただけで、一言も喋らなかつた。そしてカシの木の杖にすがり、白い顎髭を風になびかせながらゆつくりと原つばに向けて歩きだした。雄次や康太が後を追つたが、権造爺さんは一度も振り返らず原つばを突つ切り、かんかん石の方に真直ぐに進んで行つた。

権造爺さんは、夜になつても戻つてこなかつた。主のいないカシの木の小屋のつべんに、燃えたぎつた月がのぼつてきた。月は、ヨネ子の小屋を、由加の小屋を、文江の小屋をすさまじいほどに照らし、広場や原つばや川の土手を、火の色に染めた。

星が流れた。幾筋も、幾筋も東の空に現われ、流れ、西の原の木々の向こうに落ちていつた。

友紀夫は、権造爺さんが去つたあとの広場に立つて、火の山の方を見ている。権造爺さんは、火の山に行つたに違いない。火の山に着くのは、七日目の晩になると聞いているから、いま頃権造爺さんはこの燃え盛る光の下を、カシの木の杖にすがりながらゆつくり歩いてる筈である。そんな権造爺さんの姿が、友紀夫にははつきり目に見える。

大人たちはみんな、権造爺さんのいつもの一人歩きだとして

も思つたのか、権造爺さんが戻っていないことには気付かず、由加の小屋ではいつもの騒ぎを始めている。良則の（オドミヤアボンギリボンギリ）が何度も繰り返して聞こえるし、宝田の太い笑い声も聞こえる。

文江の小屋では、すっかり傷の治った良久がギンブナをかじりながら、ちびちび飲んでいる筈である。夕方、久しぶりに分け前のときに姿を見せた徳さんも、もらつたばかりの新しい芋を灰の中から掘り起こし、菌のない口元を炭色に汚しながら、地べたに転がっている頃かもしれない。

友紀夫は、ヨネ子の小屋にいる筈の友子のことを、何度も考える。権造爺さんが火の山に行つたということは、必ずなにかよくないことが起こるといふ知らせであるのだが、こんなときにもすぐに友子のことには頭がまわつてしまふ。

由加の小屋に戻るところは見なかつたから、友子はいつもあの真暗いヨネ子の小屋にうずくまっているに違いない。涙と血と煤にまみれた友子は、どんな気持でうずくまっているのだろう。

友紀夫は、そう考えただけで胸が縮んでしまいそうになる。それより、友子をそんな目に合わせた宝田が憎い。友子をヨネ子の小屋に無理矢理押し込み、殴つたり蹴つたりするなんて、火の山や、蛇の山や、魔の山などよりもずっとたちの悪いやつをすることだ。そんな目に合うほどの失敗を、友子になにかやらかしたというのだろうか。

友紀夫にはよくわからないが、それは違ふと思う。これは、もしかしたら、自分が友子のことを考えるときに胸がギュツ

と縮むことに関係があるのではないかと思う。

いま自分が友子の前に現われたら、友子はまた出て行けというだろうか、と友紀夫は考える。あるいは、友子をもう一度怒らせてしまうことになるのだろうか、と思案する。友紀夫にはわからない。いま自分が行つてやらなければ、友子はとりかえしのつかないことになるのではないかとも思えるし、明日になれば、案外なんでもない顔で由加の小屋に戻るのではないかとも思われる。その証拠に、誰も友子のことを助けようといひ出す者もいなかった。

良久は、「ほほう、友子がねえ」といつたきり、まるでとりあわなかつた。哲也などは、ただ薄笑いを浮かべているばかりだつた。

やつぱりヨネ子の小屋に行こう。友子が怒つたら怒つたでもいい。おやすみ、をいうだけでいい。このまま友子に会わないでいると、やつぱりよくないことになりそうである。嫌われても怒鳴られてもいい。そう考えると、友紀夫は広場をやつと動く気になり、白みかけた月明かりの下を、ヨネ子の小屋に向かつた。

小屋の入口で、友紀夫は友子を呼んだ。低い声で呼んだ。しかし、答えはなかつた。もう一度呼んだ。やつぱりなんの答えもなかつた。友紀夫は、夕方友子がうずくまっていた丸太の傍に立つてみた。その地面には薄明かりのなかに、激しく争つた跡が幾本もの乱れた筋となつて、はつきり残っていた。それはまだ、いま生々しく開いたばかりの傷口みだいだつた。

いていたときみたいな恐さはなかつた。

虫の声は続いている。

「ん、なに」友紀夫は、徳さんの口に耳を近付けた。徳さんがなにかいつた気がしたのである。

「ん、なに」

「メ、リ」

「どうしたの、え」

「メ、リ、ー、ゴ、ー、ラ、ウ、ン、ド」

「えっ、なにいつてるの」友紀夫がさういうと、また虫の声になつてしまふ。友紀夫は、「徳さん、徳さんどうしたの」と、徳さんのあばら骨のあたりを夢中でさすつた。（了）

ヨネ子の小屋を出た。小屋を出てもなく歩いた。気が付いたとき、友紀夫は徳さんの岩屋の入口に立つていた。徳さんの岩屋にくるつもりなどなかつたのに、いつの間にかきていた。

リーリーと虫が鳴いている。

友紀夫は、暗い岩屋の中を手探りで進んだ。すると、指の先に硬い棒が触れた。徳さんである。徳さんの腕である。

「徳さん」と友紀夫がいつた。「徳さん」といつて、あばら骨のあたりを揺すつた。

その途端、あまりの熱さに驚いて手を引つ込めた。徳さんの体が燃えている。瞬間、そう思つたほど熱い。「徳さん」と友紀夫は叫んだ。「徳さん」ともう一度叫んだ。徳さんになにも答えない。「どうしたの、徳さん」友紀夫は徳さんの耳元で叫んだ。すると、それまでリーリーと鳴っていた虫の声が止んで、ヒイーという人の声になつた。

徳さんのうめき声である。しかし、すぐにまた虫の声になる。虫の声は、実は徳さんの喉に通う空気の音だつた。リーリーと虫の声は鳴る。「徳さん、徳さん」と友紀夫は呼んだ。不思議に、以前徳さんがあの本を体の下に丸め込んで、うめ